9月號

婦人運動

第6巻 第8號



職業婦人社發行

大正十三年十一月二十二日第三種郵便物認可 （每月一回一日發行） 昭和三年八月三十日印刷納本

家事科研究の最高權威書！　甲斐久女史の五大名著

家事研究大系 第二卷 被服裝飾篇

甲斐久子女史著

菊大判五二八頁クロース最上製
口繪三色版數葉、挿畫多數

定價四圓八拾錢

凡そ今日ほど服飾の多樣複雜な時代はあるまい。其の形式に於て和洋支の各樣あるは勿論その材料、其の形態、色調等に至つては誠に千態萬樣、何人も一々之れが調製、整理、保存等に就て統整する知識と技術とを有するものはあるまい。本書は實に甲斐先生が西陣の本場を背景として永年學理的實際的に心血を注いで研究されし成果にして、全人類のあらゆる服飾に關し組織的體系を以て記述されしもの、家政上の寶庫たるは勿論受驗用、教授用として絕好無比の良書である。

家事研究大系（第一卷 食養篇）
菊判七〇〇頁
定價四圓八〇錢
送料廿七錢

現代作法精義
菊判四〇〇頁
定價三圓八〇錢
送料廿七錢

系統的家政講話
菊判八三〇頁
定價七圓
送料卅七錢

現代作法書
菊判二〇〇頁
定價九拾錢
送料十八錢

東京市麴町區下六番町
振替東京二九三六九番
平凡社
電話九段 一六六四番 三四七五番 三六四七番

◇女性運動研究家は先づ女性勞働運動史を研究しろ！

解放群書(29)

赤松克麿・明子共著

特別上製箱入 四六判三百頁

定價壹圓 送料拾錢

英國婦人勞働運動史

◇本書は嚢に厚生閣から壹圓八十錢で出版されたものと同一物なる特別上製の新版である。絶對必要上壹本を購求した女性問題、社會問題の研究家は、傍ら又、世界の定評ある、この名著のこの名譯が、この製本この上紙この頁數で何故壹圓で賣れるかといふことを研究する必要がある。

内容

◎序

◎初期の婦人勞働組合

◎婦人聯盟並婦人團體の設立

◎男子組合の開放

◎全國聯合會及近代組合運動

◎歐洲大戰の危機以後

◇女性問題研究家は勿論の事、社會運動研究家も婦人運動研究家も是非この世界的名著名譯を一本購求讀破する必要がある。

◇圓本家は勿論の事、出版家も著述家も是非この壓倒的特別廉價版を一本購求熟考する必要がある。

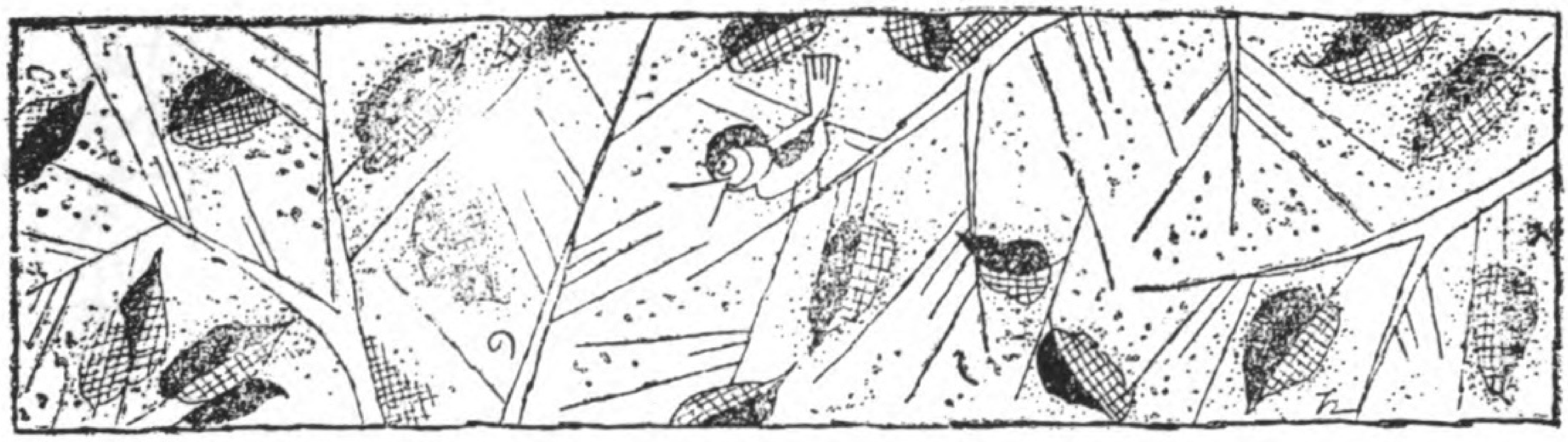
◇婦人運動を知らんとせば先づ英國婦人勞働運動史を知れ！

『解放群書』『宣傳用書』及月刊誌『解放』發行所

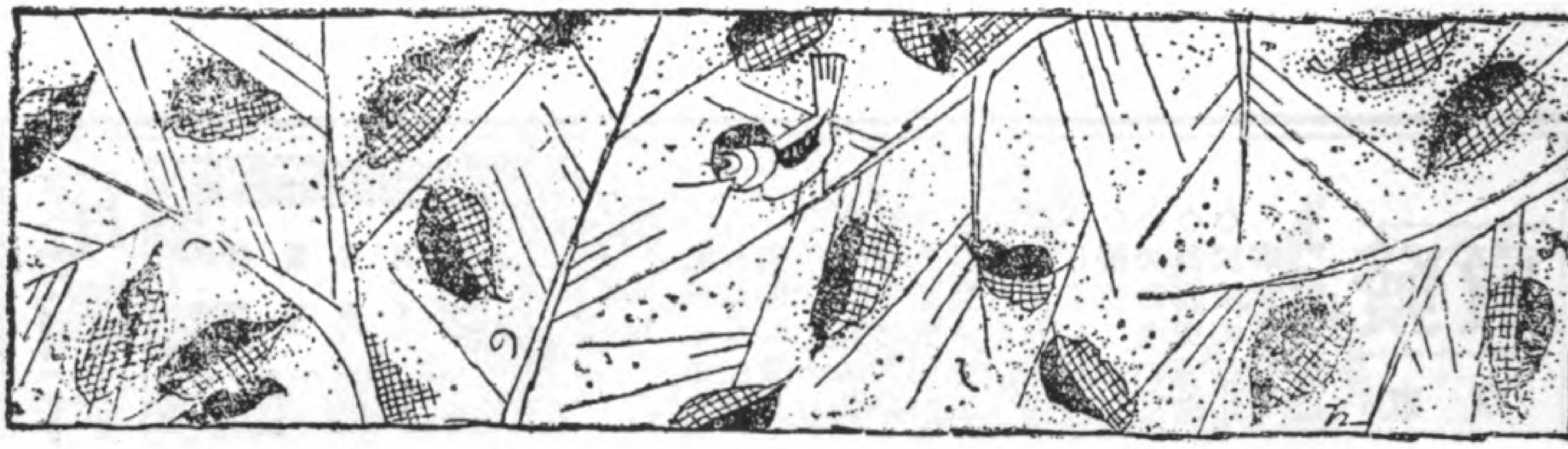
解放社

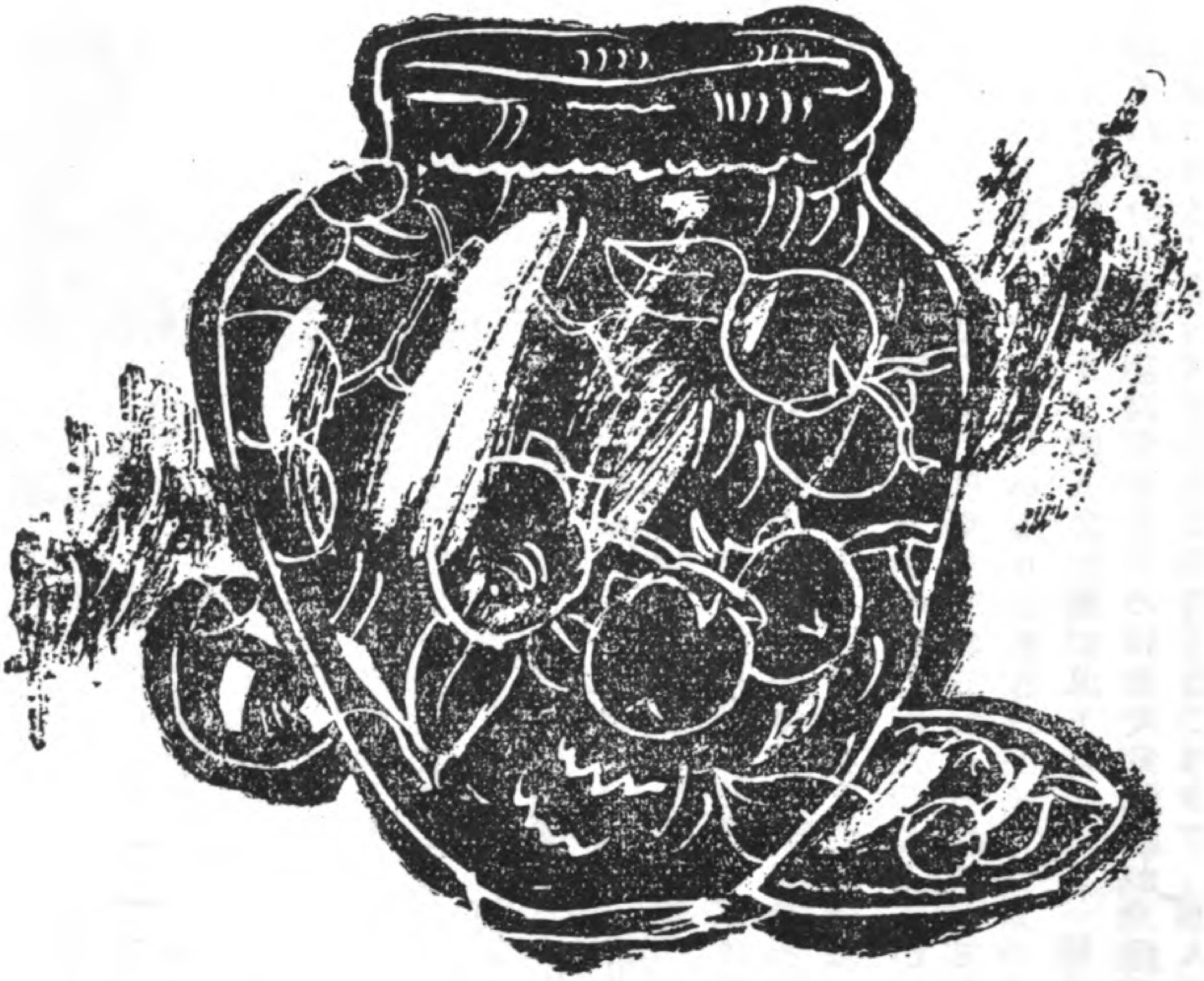
東京芝區新櫻田町十九

振替東京三六九四四番



婦人運動 九月號 第六巻第八號 目次





母性愛の新意義

三角關係、四角關係、戀を拾ふ話、戀愛座談會、足、脛、……煩い。

戀愛の過剩、有史以來、男性淘汰の支配にあつた男女關係は、將に恐慌期に入つたと云ふべきあらう。

私達はこの泥沼の中で、再び、人生の古き賜物である母性愛を玩味しやうではないか。

「安價な母性愛なんか」自己の偏愛を啗く前ぶれとして、こう云ひ乍ら差出す白き手の獵人の腕を彈きかえせ。

婦人を、過去の隷屬の世界に結びつけるために御用道學者によつて亂用された鐵鎖としての母性愛から母性愛の名譽を救へ。

さうして、新文化建設にいそしむ一個の人間としての女性が、新社會へ贈る美くしい花環として母性愛を復活させよ。

何故ならば母性愛は、過去數十年來凡ゆる人間的なものを奪はれ乍ら、なほも女性が持ちこたへた最も根强い、超個人主義的な最初の、さうして最後の本能であるから。



この二つの問題を通して

奥むめお

政治の腐敗に蹶起したる婦人へ

われ〱東京市内外に住む者は、最近板舟權の問題、京成電車の市內乘入問題、二業地三業地許可問題等と關聯した東京市會の醜狀を目のあたりにして（五六頁參照）今日の政治家といふものはどこまで惡い事をするのか底が知れないことに、今更驚きあきれてゐる。

それに就ていろんな團體が對策運動の實行に入つてゐるが、そして婦人團體でも二三、市會の淨化、二業地反對、公民權要求等の火の手を揚げて鬪つてゐるやうであるが、それにしても婦人が未だ一票を許されない不便さ卽ち、公民權、參政權をもたないことの不便さは、憤ろしい限りである。

われらに公民權を與へよ、婦人參政權要求！

婦人のこの政治的權利を追求する火の如き大衆運動が、此の際、東京市內外に住んでゐる婦人たちに依つて併せ行はれるのでたければ、結局、際物的な花火線香式運動に終つてしまいはせぬか、と不安である。

われ〱は一部の婦人運動者が樂觀してゐるやうに、婦人が一票を得て欲する人に投票することが出來、又自ら投票される

事が出來さへすれば、と云ふやうな單なる婦選の實現に、政界廓清の一切の期待をかけてゐる者ではない。(今日のやうな墮落腐敗その極に達してゐる實際政治の驅け引きの渦中で、婦人は未だ利權に汚れてゐないから、とか、婦人は平和を好むものだ、とか、婦人のもつ母性愛に信頼して、とか云つてゐる抽象的なあこがれが、どれだけ役に立つものであらう)去る二月の普選に依る最初の總選擧の結果を見よ、一般の人々にたとへ一票を許されても、今日の政治界のうち、政黨政治の實際に關する正しい理解とそれについてのしつかりした對策を掴んでゐなければ、よし、新しい有權者が舊有權者の四倍數に近い一千萬の增加があつたとしても、新興無產階級の代表者を八名しか出さず、大多數の投票は從來の政治界の分野の延長にしか役立たなかつたあのやうな結果しか齎しえないものである。

今日、現東京市會議員に總辭職を迫り、婦人をも含む普選に依る改選を要求し、二業地三業地反對の運動をつゞけてゐる婦人團體の人々に、かういふ問題についての根本的な考察が行はれてゐるであろうか。私の婆心は敢へて次のやうな事實を諸姉に提したいと思ふ。

一體政界のどの出來事にも(無產政黨だけは、立黨の精神に於て全然ちがふ。從つてこの場合含まない)金錢がつきものである。大臣になるにも、一黨の總裁になるにも、脫黨するにも、新黨を作るにも、代議士になるにも!　二業地三業地を許可した裏面には、莫大な運動費が當局者及び政治家の間にばら撒かれた、板舟權報償案のためには十萬圓、京成電車の市內乘入れには四十萬圓といはれてゐるのであるが、さういふ運動費に代議士や市會議員たちが抱きこまれて左にも右にも走るとは何といふことだ!　と今更あきれる方が餘程迂濶なのである。元來わが國の政治は立憲政治とはいひ條、政黨の背後にはつねに巨萬の黨費を負擔する大資本家がゐる。どの政黨もこの金力にあやつられて、背後の大資本家の利權擁護の走狗になりきつてゐるのである。換言すれば、われらの代表者としての代議士、府市會議員等の大多數は、大なれ、小なれ、少數の特權階級の利益を代表して、政治を一種の搾取機關として御用づとめをしてゐるに過ぎない者である。從つて、彼らの行ふ政治とは利權爭奪の公具でしかない、國家、社會、國民の實生活などが何で彼らにとつて問題であろう。

われ〳〵が徹底普選を要求し、婦人の參政權を必要とするのは、實に、かういふ誤つた基礎の上に樹てられた今日の政治を根本的にたて直すためには、國民の總意――無產者が九割强を占めるといはれてゐる――を政治の上に反映させなければならぬからである。眞に大衆の生活にその根底をおき常に大衆の意志が政治上によく働くことが出來るやうな機關をしつかりと打

ち建てゝ、これまで一部特權階級の手に壟斷されてゐた政治を、われ〳〵の手に戻す、さういふためにのみ婦人の參政權は要求されなければならないのである。

　市會に於ける如くあまりに甚しい醜狀に多くの國民がおどろきあきれてゐるこのときに、特に機會を逸せず、その依つて來るところの原因に就いて、何故市會議員は（多くの代議士や一般政治家の場合も含めて）さう惡い事をするのかについて、わが政界の積惡の根本問題をみんなが正しく理解して、抗爭するやうに努めてゆきたいものである。

大デパートの發達と消費者階級

「今日は三越、あすは帝劇」といふ言葉がよく現してゐるやうに、これまで三越とか、松坂屋、白木屋などの大デパートは一般の人々にはあまり用のない贅澤階級相手のものであつた。然し、大震災を境として大變化が現れた。勿論贅澤階級相手の商、品も澤山陳列されてゐるのであるが、それよりも遙かに多く一般庶民階級の需要に應じた日用品が、——最近には、味噌、醬油、たわし、マッチから、惣菜用おかずまで賣られてゐる——而も一般の市價より安く、をいしく、きれいな包裝と、行屆いた配達と、年少の美しい男女店員の愛嬌とを景物にして賣られてゐるのである。

　この大デパートの社會化、に最も大きな影響をうけるものは中間商人と消費組合である。消費組合は、生產者から直ちに消費者へ！　を標語として中間の搾取階級を拔きにした廉値で組合員の日用必需品を供給しやうとしてゐるものであるが、現在の資本主義、商業組織の間に介在して、消費組合運動者が、多からぬ組合員の出資を資本に、仕入から販賣の一切を行はうとすることは二重三重の困難である。小資本の小商人が大資本を擁する大商人の敵では到底ないやうに（今日おびたゞしい數に上る小商人がその生計を保持することが出來ず轉業したり、沒落したりしつゝある）如何に組合意識の强固な組合員の團結に依つて、消費組合がその事業を行つてゐるとしても、今日の大資本組織のデパートには匹敵すべくもない。

　而も現在のわが消費組合運動は、（地方のことは暫く云はず）東京に於ては群雄割據の時代で、幾つもの組合が互ひに組合員の爭奪配給區域の割込み、個々別々仕入等々、その間の聯絡統一を要望する聲はいつも聞くのであるが、扨、それがいつにな

つたら成るか、心細い限りである上に、組合員の組合に對する理解、組合意識、團結しやうとする心構へなど、未だ非常に薄弱だといはねばならぬ。この間に挾まれて一家の消費經濟の主體をなすところの多くの主婦が、氣持よくて廉くて便利重寶な大デパートにます／＼吸收されてゆくだらうことは容易に考へられることでないだらうか。

今日こそ、三越、白木、松坂屋と、それ／＼に猛烈な競爭をしてゐて、販賣總額も利率も、仕入方法もみな嚴重な秘密主義で行はれてゐるやうであるが、資本主義の發達に伴つて小資本の事業は、次第に叩潰されてます／＼大規模になると共に、外の産業に於てみなさうである樣に、それらのデパートに於ても大資本の集注が行はれて、一大カルテル（資本家の聯合）トラスト（大資本の合同）を組織するであらうことは容易に考へられるところである。互ひに競爭をしてゐる時代こそ、顧客たる消費階級はいはゆる漁夫の利で、ます／＼廉くてよい品を手に入れられるのであるが、――いくら廉くとも、營利的な商賣であることに變りはないのであるが――トラストやカルテルが行はれて商賣が獨占的に行はれるやうになると、一般消費者たる顧客は、完全に彼らの支配下に隷屬せしめられるのであつて、販賣品の價格は、彼らの自由に決定するところとなつて、消費者は全然それに對して無力となり、賣られるまゝに買はねばならぬ立場におひつめられてゆく。

かくて、中間の商人が大デパートに押されるばかりでなく、消費組合もデパートに押されて、日用必需品の多くがその獨占的な資本の跳梁にまかせられるやうになつた時は、消費者階級が完全に資本家の前に屈服したときである。

われ／＼は特に婦人として、その擔當するところの消費經濟方面の生活を合理的に確立するために、一方には消費組合の仕事を盛んにするための運動にあらゆる障碍を突破して熱心に協力すると共に、一方、今日の資本主義の禍から、われ／＼の生活を完全に救ふ道を求めてつねに鬪ひ進むべきである。

富山縣に起つた電燈爭議

笹沼俊夫

富山縣滑川町――こういへば誰しも、あの大正八年の米騒動を思ひ出すであらう。こゝに火の手をあげた米騒動は、旬日ならずして日本全國にひろがつて、わが日本にも革命が起るかと思はしめたのであつた。この同じ富山縣滑川町に、最近電燈爭議が起り、これが又隣接町村に波及し、全國に及ぼうとしてゐることは讀者諸姉のすでによく知られてゐることだろうと思ふ。

富山電氣株式會社は、年一割四分の配當をなし、電力料金は一馬力九圓、電燈料金は十燭光七十錢である。

ところがこの種の公益事業にあつては、配當は九分から一割が普通であり、(これにしても幾多の名稱で暴利をむさぼつてはゐるが)電力料金は一馬力について、富山電氣會社を除けば、全國で最高位に位するものでも七圓二十錢に達してゐるにすぎず、電燈料は十燭光で、最高が六十三錢である。こゝに於てか昨年來富山縣滑川町では電燈料値下期成同盟聯合會が組織され、三割五分の値下を會社に迫つた。しかしながら貪慾あくことを知らぬ會社側は、これに少しも耳をかさずひとへに私利私慾に汲々として、一般民衆の苦しみや要求などは少しも顧みなかつたのである。

こゝに於てか値下期成同盟聯合會は料金不納同盟を結んで會社の暴虐に對抗するやうにした。そこで縣會議員、町會議員町長等は、會社と値下期成同盟聯合會との間を調停するために、調停委員會を作つて、一割五分二厘五毛値下げといふどの點から割り出したか知らぬが、とにかく町民の利益を全

然顧みない調停案を作成して、こゝらで讓步するやうにと說いた。然るに、會社はこの調停案さへも容れようとはしなかつた。

かくて不納同盟は續行され、遂に七月二十六日には、會社は不當にも電線を斷つて町民に對抗するやうになつた。それは隣り合つてゐるところの東岩瀨町、東西水橋町、三日市町五百石町、上小泉村にも波及して、現在に於てはこれ等の町村の町村民も亦值下同盟聯合會に加入して會社との鬪爭をつゞける形勢になつたからである。そこで同盟聯合會は斷線に對抗するに、富山電氣會社の送電線電柱の撤去を要求し、營利的な株式會社富山電氣會社の代りに町營の電氣會社を實現しなければならぬ事を高唱してゐる。そして結束はいよ〳〵固く、連日連夜演說會、宣傳ビラ、ポスター貼り、會社攻擊の同盟歌を高くうたつて步く示威運動など村から村へ、町から町へ間斷なくつゞけられてゐる。

更にこの運動は富山市にも及び、次いで石川縣、輪島港にも與能青年自由黨の二割值下、京都府下龜岡町の二割五分值下、福知山における一馬力十五圓を五圓九十錢に、十六燭光八十五錢を七十三錢に值下げせんとする各地の值下運動を誘起した。そしてこの運動は更に全國に向つて波及せんとしてゐるのである。

こゝに於て狼狽せる白根富山縣知事は、急遽上京して、遞信省の官吏等と協議し、遞信省案としては、一割三分值下を正當と認め、會社も亦この調停案に無條件に應ぜんとするけはひを見せてゐる。

これらの事實、富山縣における民衆の熱心なる運動、それの全國への波及、當局さへが一割三分の值下を至當と認むるこれらの事實は、一體何事を物語るであらうか。

富山電氣會社が、從來暴利をむさぼりつゝあつたこと、全國いたるところで多かれ少かれ電燈會社が暴利をむさぼつて居ること、更に當局は意識的にせよ無意識的にもせよ、この暴利を擁護せることをこの事實は明らかに物語るものではないか。

一方電化の勢は、ます〳〵盛んになる一方で全國に於ても電燈を使用せざるところは殆んどない。電燈は今や我々の生活必需品である。

我々一般無產大衆の生活は、最近ます〳〵貧窮化しつゝある。これは少數資本家の手に利益が壟斷されるからである。

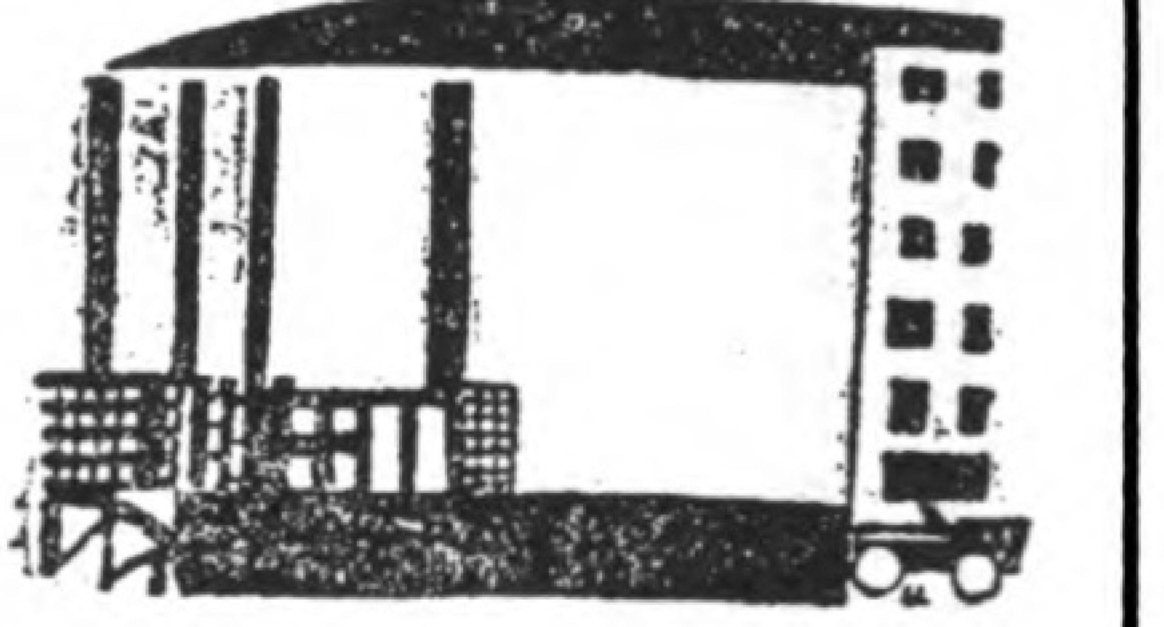
少數資本家は、多數民衆をしぼりにしぼつて、自分らは段々と肥りつゝある。我々が十燭の光を得るために支拂つてゐる料金の多くの部分は、これら少數の資本家を肥らしめるために出してゐるといふのが現狀である。我々はまづかゝる直接の利益を擁護してかゝらねばならぬ。それは我々みづから自らを救ふ所以である。しかし我々は個々的にやるのでは、それは蟷螂の斧に等しいものである。

富山縣の事實はそれを證明してゐるではないか、全町をあげて、その暗黑化の不便をしのいでまでの困難な鬪爭をつゞけてさへ、なほその目的の貫徹は容易ではない。全國的に組織されたる猛運動があつてこそはじめて、かゝる資本家の暴虐に對抗し得るのである。

無産政黨は、社會民衆黨、日勞黨、無産大衆黨、皆その代表者を送り、或は當局に抗議するなど大いに一般民衆のために鬪爭しつゝあるのは喜ばしいことである。しかし、悲しい哉未だ力弱く全國的にこの運動を展開し、大衆の威力によつてこれを解決することはできてゐない。これは現在我國に於ける無産政黨が四分五裂してゐて、たゞさへ力弱きに加へて更にこれを弱めてゐるからである。この點から考へても無産諸政黨は一日も早く合同してその鬪爭力を、强力にせねばならぬ。といつてこれは決して我々から、はなれた問題ではない。我々も大いに積極的に無産政黨の運動に參加して、その統一を促進し、更に一歩をすゝめてその戰線の純化につとめねばならぬ。それは特に讀者諸姉に課せられた任務でもあらねばならぬ。

電燈料にかぎらず、瓦斯の料金にしても、水道の料金にしても、決して現在低廉ではない。しかもこれを使はねば生きては行かれない。實に我々にとつては死活の問題である。

我々は常にかういふ日常當面の問題について、他人事とは考へずに大いに積極的に協力して鬪爭する考を持つに至らなければ、決して我々の利益は擁護されず、我々の解放の日は永久に來らぬであらう。團結こそは我々に力を與へ光を與へるものである。



このやうな婦人を僕は見た

新居格

このやうな婦人を見た。そしてわたしは少なからぬ示唆をうけ取つた。このやうな婦人それはどのやうな婦人であるのか。その人は東京から四百五十六哩離れたところに、住んでゐる。丘陵の傾斜面に三百六十二本の林檎樹と花畑と三町歩(林檎畑を加へて)の耕作地をもつ夫と共にある。彼女その人は實によく働く。林檎に袋をかけるのも土地を耕やし草を取り、花を咲かせ、家畜を育てる。勞働の婦人である。力闘的である。だから、彼女は白ろい手の婦人の群ではない。顔は太陽に焦けて赤黒い。熟した梨のやうに丈夫相である。大都會の病的な女達はタバコのけむりを投げ遣りにふかしつゝ云ふ。

——あたし丈夫な人きらひよ——

云ふこゝろは病弱と、纖細とを同義語と見てゐるのかも知れない。こゝで描寫する婦人は丈夫そうだけれど粗野ではない。そりや働くんだもの、輕井澤でテニスをするブルジヨア婦人のやうに、氣取つたテニス靴なんかは穿かないのは勿論です。ゴム靴をはいてゐます。ロシアの百姓女のやうなルバシユカを着てゐます。毛絲で編んだちよつとした帽子を冠むつてゐます。それらは働くのに最も適當な格好だからです。

その人のパツチリした眼は、怜悧に輝いてゐると同時に、デリケートなやさしみを湛えてゐます。夕方、彼女が勞働を終つて浴みして白ろい服をつけてゐるのを見た。パツと咲いた夕顔のやうにも思はれた。夫妻は社會主義者だから、ミレーが描いた晩鐘のやうに夕ぐれときの畑のなかで、祈ることはないでせうが、祈りをぬいたミレーの畫を二人にあてはめることも出來るかも知れません。

たゞ働く、それだつて都會の婦人には驚きでせうが、たゞ働くだけなら、田舍の女には少なくないことですが、その人はよく本をよむ、しかもいゝ本で堅い本をよむ。夜は彼女のよき時間。山ですから、晝間は郭公、夜は梟、しづかな天地です。燈心が油を吸ひ上げるやうに、彼女の頭は知識を吸ひ取つて明りが頭のなかに點く譯です。華麗な街の散歩、明るい劇場の廊下、ダンスホールの舞踏。そんなものゝ情景は幻にだつて、その人のものではなからうけれど、健康、勞働、讀書、熟眠の四大福音が、彼女の生活に又となき快調の音譜を形造つてゐるのですから、仕合せです。平和あり、そして幸福が。

原始人らしい健康と、都會婦人を遙かに凌ぐ知識との結合、泉のやうに自づと湧いて出る自然のデリカシー、わたしはもつとも望ましいそしてまた最も新しい婦人の型を見た。

そのやうな婦人の時代が來たりつゝある。その雛形をその人の生活から、私は拾ひ上げた。

そこは、東京から四百五十六哩の地點である。

そこで田舍で、そのやうな婦人を私は見た。その婦人から受けた印象で、ほんとうに正しく新しくあるべき、婦人の要素を考へつゝある私の思索進行に、人々！ 贊否をきかせてもらひたく思つてゐる。



商品の墮落

白柳秀湖

今日の社會問題を論ずるもの丶重大な見おとしは、惡制度の根がいかに社會一般を苦しめてゐるかについての考察、これである。消費組合運動が唯物論的であるといふことは憂うるに足らぬ。だが、今日の惡制度が、消費者階級をいかに惱まし苦しめてゐるかについて充分考へてみる必要がある。

今春の議會で、無產黨の議員西尾末廣氏が、議會の質問演說で「現行の健康保險の政府負擔額を增額してくれないか」と云つたのに對して、鈴木內相は、蟻の甘きにつくが如くに勢よく、「贊成です」と飛びついて來た。これは以前から、醫師會側として六割增しの要求をして來てゐるので、政府としては何らかの口實を設けて增したくてたまらなかつたところだからである。然し、これは燒石に水をそゝぐ如く無益なもので、一體健康保險は資本主義的組合に利用されるばかりで國民の保險にはよく利用されがたいものである。

この樣に、表面だけみるとよいやうに見えて、實際は反つて弊害多いのが今日の惡制度である事を知らないところに、うま〱と先方の思ふツボに陷れられてしまふ拔かりが出て來る。これはよくあることである。理論討爭を、いくらえらくしやべることが出來ても、實際われ〱の日常生活で、如何に惡制度が根深くはびこつてゐてわれ〱を苦しめてゐるか、これをよく知らなければならない。

婦人は殊に、かういふ方面に目を開く必要がある。

文明の進步について、古來疑ひを抱いた人は古來隨分多い

文明は進んでゐるのか、退歩してゐるのか？ といふのは、一寸考へても、下等動物の方が人間より遥かに上品でまさつてゐる様に見える事が決して少なくないのである。學者の調べたところに依ると、雀は、自然に砂風呂に入つてからだを清めることを知つて居り、犬や猫は惡い毒性の食物をとると或種の草をたべて胃腸の掃除をするといふ。鹿や猪は、傷をうけると沼地で洗つてその傷の手當てをすることをよく知つてゐるし、直覺的に毒草を撰みわける動物も澤山ある。然しこれらの動物のもつてゐる力は、與へられた刺戟本能であつて、人間は、智力を以て、もつと複雑したことを、もつと遠い原因をも知ることが出來るのである。

扨、今日は産業革命に依つて、大量生産を行ふ。澤山の人が、比較的よいものを、容易く手に入れられる様になつてゐる。こゝに、資本主義の trap（陷穽）があることを忘れてならぬ。例へば流行にしても、ある資本主義の店で考案し發表した流行に、多くの人が支配されてどん／＼追隨してゆく。そしてその流行品たる商品は非常な勢ひで賣れてゆくのであるが、その間に品質は段々惡くされて行つてゐることに人々は氣がつかないのである。

ところで商品の墮落を考へるに、次の三つの理由をあげられると思ふ。

一、粗製濫造
二、商品産地の詐稱
三、レッテルの安賣り又は僞造

一、粗製濫造

商品の成立の約束を無視したものが多いことは驚くばかりである。いくら品物が安いのがいゝからと云つて、使用に堪えないものを要求してゐる者はない。然し、小學校兒童の鉛筆でも、安い品は、初めからすぐ折れるやうな材料で作られてゐる。蠟燭でも、夏季には、すぐに曲つてしまふ物が尠くない。（警視廳の防火宣傳のポスターに、曲つた蠟燭の繪が書いてある）蚊やり線香は、除虫菊の粉末で蚊を殺すのが目的であるにも拘らず、近頃の粗製品は、のりと、おが屑と、變な臭ひの藥とを以てごまかしのものであるから、本來の目的を達して呉れない。

砂糖の中には、白土を入れて量目をふやしてゐる（一俵の

砂糖をあけるとき、一升の水を吹き入れて重量をつけるといふ奸手段もある）

バターの中には植物性の脂油が加へられてゐ、ウヰスキイには、砂糖の原料からとる悪質のアルコールが加へられてゐる者が多い。そば粉——片栗粉の中には、コンフラワ——やさつま芋の粉が混ぜこまれる。

二、産地の詐稱

水晶は甲州産であると思つてゐると、ブラジルから一旦甲州まで運んで、更に、甲州から賣り出してゐるものが随分多い。ナイヤガラの近くで名産として賣つてゐるアルミニュームの製品は、みな日本製品であるし、日本の下駄で、ドイツから輸入されて來たものが少なくない。名産ヨーカンのいろ〳〵は多く東京で作られて、レッテルだけとりかへて各地に擴まつてゐると云はれてゐる、宇治茶、淺草のりは、伊勢の海でとれるのりである。

みな、産地崇拜の盲目的な愚かさが、その原因になつてゐる。

三 レッテルの不正

龜甲萬醤油が、全國各地は云ふに及ばずハワイ、カリホルニア、ロズアンゼルス等で非常にもてはやされるので、近來は近地から駄醤油を買ひ集めて、一樽について二十錢の割でレッテルを賣つて貼らせてゐる。だから中味の随分ひどい龜甲萬がよくあるのである。

酒の如きも、これは産地の空氣と密接な關係がある、然るに今の生産者はその約束を無視して、生産工程の改良に努力する代りに、全國に人を派して地酒を買ひ集めさせて、一枚幾らでレッテルを貼らせて賣り出してゐる有名な酒がある。

全て、かういふ卑近な陥穽に、われ〳〵が毎日おとされてゐることについて、婦人——特に消費者としての婦人が結束して摘發、曝露、非買同盟を敢て行つても、自分たちの生活を擁護すべきである。

『お宅のお嬢さんを是非いたゞき度いのですが』
『ウム、そのウ、君が娘に依つて、初めて打たれたといふ譯だね』
『えツ!!いゝえ、どういたしまして。僕等はまだ一度も喧嘩した事はありません。』

滅びゆく生命を見つめる

池田みわ子

私たちが樺太へやつて來てからもう一月半にもなるけれども、まだ樺太の最南端の港町であるこの大泊以外には、一度も旅行をした事がない。

私たちにしても、容易に來られる土地ではないのでこの機會を逃さず、歸るまでにはどうにかしてもつと奧地の方もあちこちと歩き、樺太の樺太らしい所を色々と知りたいとは思つてゐるのだが、何よりも旅費の都合を第一としていまだにそれが實現されずにゐる。

從つて樺太の話と云つても、大低はこの大泊の町のこと以外には出られないのを大變殘念にも思ひ、またすまない事にも思ふ。然し何れ奧地の事は歩き次第に又お知らせする事にして、取りあへず如何にも植民地の都市らしい此大泊についての、秋の感想を書かしてもらふ。

大泊は北海道方面から樺太にやつて來る人たちが、必らず通らなければならない街で、それだけに「樺太の町」と云つても、東京人が一がいに想像する程、それ程邊鄙な所ではなく、人口が三萬ばかり、戶數も四千五百を超えてゐて、數箇の活動常設館や劇場もあれば、二丁ばかりの夜店も毎夜出るといふかなりた都會である。然し町の何處でもが雜然としてゐて、何の都市計畫もなしに、だらしなく發展したらしいところ、飲食店の殊更に多いところ、又そこを通る人たちの荒つぽいところなど、如何にも植民地らしい感じがする。

それに何より閉口することは道路が惡い。實に惡い。東京の惡路は世界でも有名な相だが、とてもそれどころの比では

ない。一日雨が降ると、文字通り泥濘膝を沒するで、そのあとが一週間程、かわかない。だから雨あがりに路を行人は、向ふ側に渡り度くとも、道路を横斷する事は出來ない。通りの兩側に幅三尺ばかりの下水があつて、それには三寸位の厚さの板で、蓋がしてある。そして一丁毎に、その板張りの下水路を横切る縱通りの下水路が有るので、向ふ側に渡るものは、それらの板の上を、傳つてぐるつとコの字形に歩いて行く。

こゝでは雨が降ると、男でも女でも子供でも、みんな澱粉靴といふ、ゴムの長靴をはいて歩く。これは上等でも一足一圓五十錢位で買へる。安いのは嬉しいが、ながい間はいてゐると、足がむせて、皮がむけるといふ特長がある。

又この町には、人力車といふものゝ姿が一つも見うけられない。これは屹度、乘れば放うり出されて了ふのが落ちだからであらう。

その代り、實に面白い乘物がある。といふのは、ガソリンカーといつて、大きさは丁度昔の鐵道馬車位。カーと英語呼びするだけあつて、電車と同じ樣に軌道をゆくものであるがこれにはボールも何もついてゐない。從つて、空には針金がない。坂を下る時には、まるで何かに突きとばされた樣に、珍妙な箱を左右にゆすりながら、眞つしぐらに走つてゆく。反對に、上る時には、何も手頼るものがなくて、見てゐるものゝ眼には、何だか逆戻りでもはじめ相で、すこぶる氣が氣でない。が土地の人は、一かどの文明の利器を活用したつもりで、すまして乘つてゐる。それでもこのガソリンカーは、滅多に脫線したことはないといふから、東京の電車よりは感心である。

それから錦繪にある、明治維新當時、洋裝の美人を乘せて歩いた樣な馬車が幾臺もあつて、これに銀杏返しの婦人などが乘つてゆくところなど、まさにその繪の通りである。就中安來節や浪花節などの、顏見せの町廻りに、この馬車が用ひられる時には、その感が一層深い。

この路の惡い大泊にも、たつた一所だけ歩き易い處があるそこには厚さ五寸以上、幅一尺余りの丈夫な板が、四丁ばかりの間、地面へ綺麗にならべてある。お蔭でどんな大雨でも下駄で歩けるといふ、感じのいゝ舖道である。ところでこの大泊一の美しい道路に面してゐるものは何かといふに、それは大商店でもなければ、邸宅でもない。そこには、五間乃至

六間の間口を持ち、奥行きは半丁近くもあらうといふ、二階建の立派な建物がならんでゐる。そしてそのなかには、自分の持つてゐる尊い生命を、出來るだけ卑しめて、それを滅ぼす事にあらゆる努力を拂はせられてゐる不幸な女性が住んでゐる。その日その日を生きるために、若い女性が生命を賣るところ、人々は其處を「旭町のゴケヤ通り」と呼んでゐる。

　この土地でゴケといふのは、酌婦に對する名稱で、從つてゴケ屋と云へはその酌婦を置いてある店、即ち文字の上から云へば料理店、實際の上から云へば密淫賣屋なのである。現在では、この仕事にたづさはつてゐる女性は、この町で壹千人以上に及んでゐて、その三分の一は、土地の人々が「朝鮮」と呼ぶところの、若い朝鮮の婦人たちである。

　彼女達は、大抵朝鮮の人が經營してゐる店で働いてゐる。「朝鮮御料理、何々樓」と書いた大きな看板の奥には、二間程の板土間を隔てゝ、磨き上げた幅の廣い廊下が走つてゐる土間に近い廊下にかゝつてゐる、屋號を染め拔いた綠や淺黄ののれんの前には、五六人の彼女達が、夜になると何時も濃い化粧をして立つてゐる。桃色の上衣に淺黄の袴だの、眞赤な繻子の上衣に黒だとか、綠色の袴といふ樣に、その服裝は眼の痛む程、男の心をそゝる色でみたされてゐる。髪は大低眞中から分けて、頭の斜横に一束にして、くづれる樣につかねてゐる。それは斯うした生活をする女たちの結ぶ髮なのだ相で、決して眞中に結んだり、頭のまわりに卷いたりはしない。

　男達が、唄をうたつたり、口笛をふいたりしながら、ぞろ〴〵とはいると、その殆んどがひやかし客であるとは知りながらも、彼女たちは何とかしてその中から、己れの客を掴むために不馴れな日本語を、出來るだけ巧にあやつらなければならない。私は彼女たちが浴せかけられてゐる、隨分とひどい言葉を幾度となく聞いた。然し、彼女達は決して怒らなかつた。散々氣をもませられたり、馬鹿にされたりした揚句に彼女達の持つてゐた半分の卷煙草を男に奪はれて、サヨナラをされて了ふ。度々道路の眞中から（私は女性なので殊に傍へはよりにくい氣がする。それは、彼女たちが左樣した處を同性の者に見られるのを、非常に厭がる事を知つてゐるからだ）通りすがりに見せられる有樣ではあるけれど、それはそのまゝ彼女達の現實であり、私達が住んでゐるこの人生の動かすべからざる嚴格な事實である。

彼女達は大低、十五六歳から二十前後のが店へ出てゐて、日本の女の様に三十位なのは一人もゐない。その大半は人並以上の美人であつて、私でさへも、何とも云へない愛くるしい顔に、まるで妹にでも會ふ樣な嬉しさから、思はず振返つて見たのも少くはない。遠い彼女達の故郷から、人間をまるで品物かなんぞの様に、安いのは百圓位から、良いのは五六百圓どまりといふ金錢で、はる〳〵この土地へ賣られて來たのである。そして、相當の年配になると、賣れなくなるので朝鮮へ追ひ返されて了ふとか、恐らく彼女たちは其處で一層の高値に自分を賣るのであらう、二度と生れて來れるか、來れないか分らない人間の一生のうちで、一番美しい盛りの生命を、たゞ金錢故にのみ、一個の商品として彼女達は扱はれなければならない。

土地の若い者達は「朝鮮一發三圓五十錢」といふ事を口にするが、彼女達は、三圓五十錢で、その躰を誰にでも賣らなければならないのである。こゝは玉の井の様な組織とは違つてゐて、料理屋が看板であるから、客は飲食の爲に、大低一人、少くも十圓はつかふ相であるが、料理の方は彼女達と何の關係もないのであるから、彼女達の手に入る金錢と云へば役目を果しただけの三圓五十錢より外には一錢もないのである。而も、その中の半分は、主人に提供し、殘つた半分は、前借の返濟に用ひるのである。であるから、表面は殘つた半分が彼女のものゝ様であるが、事實はそれも主人の手に歸するわけである。從つて、五十圓前借のあるものは、百圓返さなければならない事になる。又、着物とか、白粉代とか、その他小使などは、すべて前借金のなかに繰込まれるのであるから、何時になつたら自由の身になれるのか、殆んどあてもつかないのが常である。これは日本の酌婦にしても矢張左様である。だが日本の女は、朝鮮の女よりずつと相場が高い買はれる時は、最上二千五百圓から最低五百圓位。そして、一夜、五圓から十圓位迄で客の相手をする。その他に祝儀といふものがあるが、朝鮮の女にはそれがない。朝鮮の女が日本の女より、何故相場が安いかと問へば、珍らしい藝が無いからと云ふが、成程それも有るかもしれぬ。然し、それよりも、たゞ、朝鮮の女であるからといふそれ丈の理由の方が、ずつと〳〵眞に近いのである。

彼女達の食事のお茶と云へば、切り干し（大根をうどんの様に切つて干したもの。百目五錢位。）だとか、茶つぱだとか

云ふ樣な、安くて大した滋養にもなり相にもないものを喰べさせられてゐる。殊に、近年不景氣な上に、一軒の家には少くとも、五六人、多くて二十人からの女を抱えてゐるので、左樣しなければ主人側もやりきれない相である。

この人達のお客になるのは、何時も安いところを目がけて來る植民地獨特の荒々しい、土方や人夫や、下級船員たちである。質悪の性病におびえ乍らも、その身を賣つて生きなければならない彼女達の心が、日増しに荒んで行くのも無理はない。いやが上にも高い聲をはり上げて、とんだ假名ちがひの安來節や鴨綠江節をうたふのは、果してお客の心をむかへるためばかりであらうか。

其筋では、去る七月廿八日から、店頭にゐて客をむかへるといふ、彼女達の張り見世を禁止した。或人は町内の風紀が直つたと云つて喜ぶかも知れない。然し、禁止された彼女達は、實際どうなつたであらう。店頭に立つて客の嘲罵を聞かなくてもいゝ代りに、彼女達は經濟的に甚だしくおびえなければならなくなつたのである。殊に港が氷つて、一月に數へる程しか船のはいらない、怖ろしい冬を持つてゐるこの土地で、八月と云へば書き入れ時なのである。彼女達は腕によりをかけて、ぞめき歩く男達をひきとめなければ、借金が殖えるばかりなのである。一夜に幾人もの男を摑まへなければ一生自由になれない彼女達なのである。彼女達は、恥よりも外聞よりも、何よりも生きてゆかなければならないのだ。ほかに何一つとして、生きて行く路も敎へられずに、たゞ一つ與へられてゐた細い狹い生命の路を、この上にも狹められる事はひやかし客の嘲罵を聞くよりも、もつと／＼苦しい事である。

然し、そんな事は、彼女達の事であつて、其筋の知つた事ではないのである。要するに、町の體裁が良くなれば、それで役目はすんだのである。

私達の同胞が、こうして一日／＼と地獄の路を急いでゐる時に、私達は一たい何をしてゐるのだ。彼女達の運命を狂はせた事について、私達には全然責任が無いであらうか。無いと云ひ切る事の出來る者があつたら云ふがいゝ。その者は、惡魔か然らずんば白痴である。

樺太には今一つ、地獄部屋と云はれてゐる不幸な男性の地獄がある。これは私の生れた北海道にもずゐ分あるものであるが、其處では限りなき勞働の搾取と間接の殺害が、公然と

行はれてゐる。これに比べたら、尼港や濟南の事件は、寧ろ小さなものである。それにも係らず後者に對しては、國民が擧つて憤激した。然しそれよりも更に甚しき大殺戮が公々然と國内に行はれてゐるのに、それを一般國民が知らぬといふのは、何と不思議な事ではないか。斯うした事をしなければ日本の國に、鐵道も敷かれなければ、隧道も作られなければ水道も引かれないといふこの事實は、今の世の何を語つてゐるであらうか。

來る九月一日、豐眞鐵道は、百餘の無産者の屍の上に目出度く開通するであらう。沿線の町々は、提灯行列や藝者の手踊りを以て、盛大に祝するとの事である。その節、乾度町長や驛長達は、禮服を着てうや／＼しく祝辭をよむであらう。何といふ恐ろしい資本主義文明の裏面であらうか。

私はこの町へ來てから、色々な事を聞いた。色々なものを見た。そして色々に考へさせられた。憤りに眠れぬ夜もあつた。今も涙ぐましい怒りにもえてゐる。そして私は私の身内に、力が湧いて來るのを感ずるのである。

——三・八・五——

池田さんたち御夫婦は、商ひをしい／＼樺太まわりをする豫定で出かけられた。カボチャを百匁六錢賣りだが、まけろ／＼と云はれて結局五錢賣りになつちやつた、と泣言を東京まで訴へてみえたのもつい先頃のこと。

ジャガ芋一升十三錢、サ、ゲ一升十五錢……。『豫定の樺太生活もあと一ケ月あるなしになつたが、扨、未だ、奥まで入つてゆくための路銀が稼げないので、やきもきしてゐます。その内握りめしをうんと脊負つて、二人で一週間ほど徒歩旅行にゆく豫定です』云々。

鷄啼の休むひまなき樏かな（政一）

△

デコ吉『おばあさん、おばあさんが姉さんの代りに歯が痛いんだつたらよかつたネ』

『おや、なぜだい。』

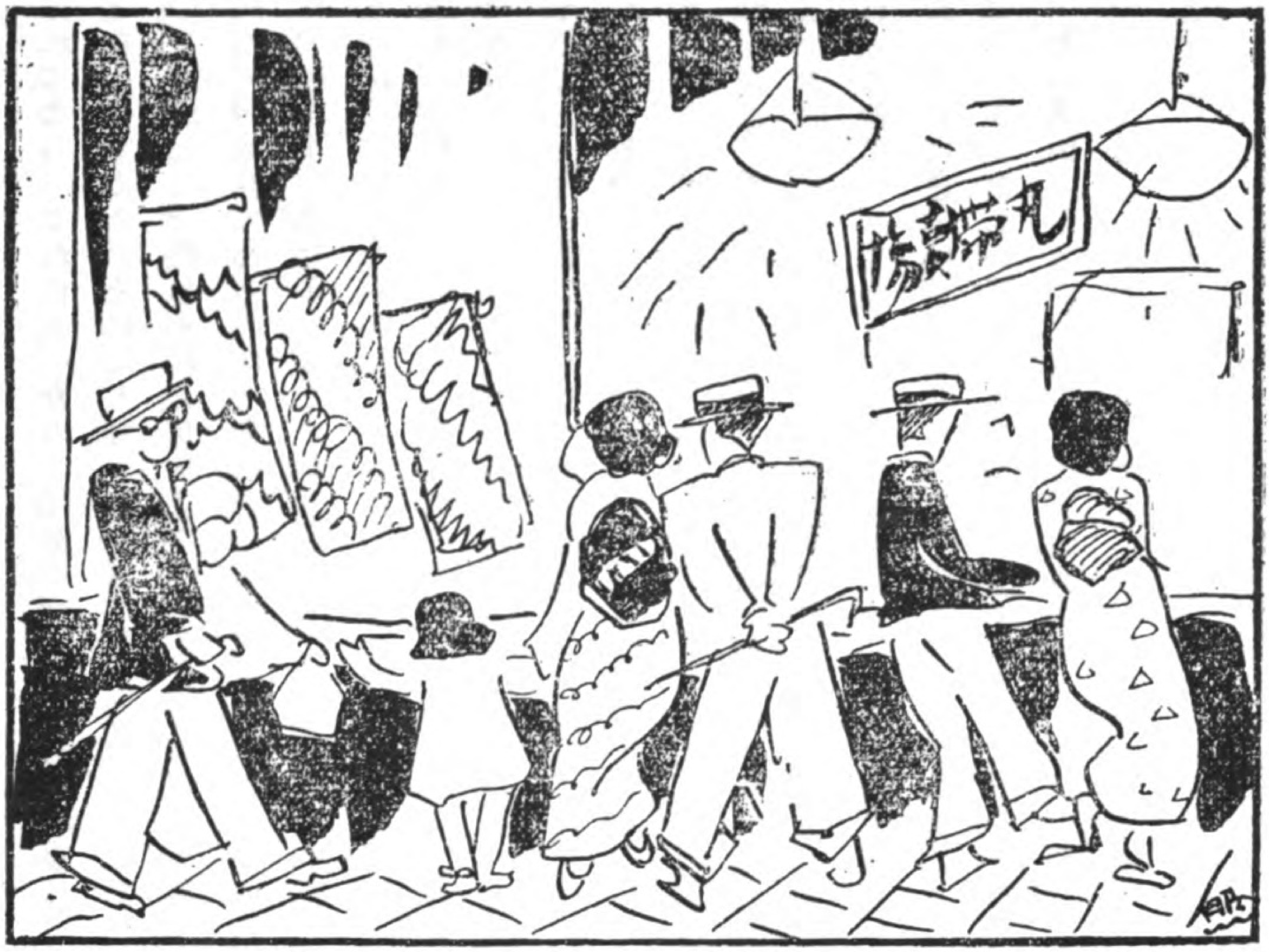
『おばあさんだつたら痛くなれば、入れ歯をはづせるぢやないか。』

△

『おい君、僕の誕生祝ひに國の親父が爲替を送つてよこしたよ』

『ステキッ!! 早速、こないだ貸したやつを返して貰はふ』

『おい／＼、さう慌てるな、夢のつゞきをおしまひまで聞けよ。』



避難所化した百貨店

劇場や活動寫眞などの開場前に、よく觀覽人が、館前に集つて、切符賣り出しの時間を待つてゐるのを、「ひまのある人間だなあ」と見かける。だが、いまはその種のひとだちを嗤ふのには、餘りに價値が低落して來た。

三越や、さては、松坂屋等その他のデパート・メントストアへ、夏なら朝の八時前に參觀に行つてごらんなさいまし、まア何といふばか氣た人間がゐること。私は見た。私は嗤へて來た。そして私は不思議に思つた。こゝでお米でも貰へるか知ら？ と。

しかし、考へ直してみると、このひとだちは、憂欝な家庭を逃避して來た氣の毒な人間でもあるやうだ。月末には借金取りの避難所、寒い時には暖いデパート、暑い時には涼しいデパート、等々々。

とに角、今日のデパート・メントストアは、都會生活者の避難場所になつてゐる。



婦人團體のバケモノ退治

百鬼夜行の伏魔殿、東京市會の正體が明るみへさらけ出されるとバケモノ退治氣取でいろんなものが飛出す。

ある婦人團體では檢事局を訪れてこれを鞭韃したとかいふ事だが、いやしくも檢事局ともあらうものが婦人から、かれこれ云はれたからというて、どうなるわけのものでなし、するべき事は外にあらうに、の感が深い。

然し、それはそれ、乙にすまして自分勝手な享樂に沒頭してゐる婦人連中は「もの好きな人もあるのねホホ、、、」つてな調子で、バケ物退治の御見物とある。

一體自治體に司法權が發動して來るのはそもそもの末である。

司法權の發動があるまで市政の暴状をほうつておいた市民の無自覺を何故鞭韃しないのか。相手は二百萬の市民だ、一人びとりを鞭韃してまわる事になれば、猫もシヤクシも總同員してなほ多すぎるといふことはない筈である。



田中大將と原敬劇

夏芝居と言ふ奴は昔から餘りたいしたものでないと言ふ通り相場、こゝは我々の生活から少々緣の遠い新橋演舞場の特等席、伊井容峰の原敬劇の眞最中、俺が大將田中首相の御臨席で怖いお伯父さんの目玉が光る。さる新聞社の寫眞班が引張られる。官服が三四十人一寸穩かならぬ風影である。

――大塚驛員室の場――中岡艮一の靑白い顏にフツトライトが氣味よく笑ふ。

「腹を切る、原を切るのか」思はせぶりな臺詞に感激した大向ふ、

「やつたな」は實感が濃い、

院外團らしいのが怒り出して、

「止めろ〱」は少々忠義が過ぎよう。

大將一寸笑顏。

東京驛と上野驛思ひ半ばに過ぎるだらう。

歷史的な因果關係が劇と見物、役者と運命を暗示〇〇〇〇

〇なと思ふ者に現代最高の芝居がある。

「支那問題の大芝居、一番打つて出ようかい」



翫具賣場
賣場の一日
女店員『あの人は今日もまたキユーピーよ』
『毎日何のために同じものを買ふのか氣がしれないわね』
『あーいふ人はいつもハートを買ひたがる男よ』
『こわいわね』



食堂の見合
息子『お母さんあの白エプロンで立つて居る方がおほいゝわ』
母『おまへどう思ふ』

ハワイだより

平田のぶ子
北村兼子

歓迎攻め

平田のぶ子

此ハワイほど、親切な歓迎ぶりの所はないと聞きますが、或階級の人達の生活の殆どが、かうした社交に充されてゐるのではないかと思ひます。

國際的に重要な位置にあるこゝでは、一層國際的社交といふものが重要視されてゐるのだらふと思ひます。

△

二十八日ホノルヽにつくと、直ぐ、もう此地の舊家、ウオーターハウスの御茶の會に招待されました。

こゝでは、ロー〳〵たる藤田氏の謡が、好評を博しました。

△

それから、個人的に、又、團體としての御招待に引廻され、私の如き神經衰弱者は、すつかり目を廻して居ります。おや、並ならぬ御好意を、かういふ言葉で表しては、あまりに失禮です。でも、これはホン音なんです。

氣候のせいもあるのでせうが、私はもうすつかりのぼせ上つて了つて、筆一つしみ〴〵持てもしなければ、一分前の事さへ記憶に止まらないのであります。

△

それに、私共野人は、充分の上にも充分緊張してゐても、國辱になるような事を仕でかさぬものとも

限りませんので、いよ〳〵堅くなつて心を引しめて居りますので、頭がボーとしてゐる上に、肩がこる事限りがありません。

他國代表

日本人のうちにも、中々押しの強いのがありますが、支那及、其他の人達は一層二層の押強さに感心しました。然もどうかすると、私共の押強さは、無禮に見えたり、下品にみえたりして不快を與へる事が多いに反し、他國、ことに支那の代表の如き、實に上品な押强さ、賢い宣傳ぶりにすつかり、私は舌を巻きました。

△

支那代表は同宿してゐるのは二人で、どちらもごく若いのです。私共日本代表は此宿に十八人もゐて數の上からも年の上からさういふ感じを受ける筈はないのですのに、私は、事々にたつた二人の支那代表から一種の壓迫感(劣等者が優者對する時のあれ)を感じます。よき意味の『モダンの支那』私は、あの二人を通じてさう感じます。

ホノルルだより

北村兼子

平田さんとぽつかり春洋丸の船室でお目にかゝりました。いつか「婦人運動」でプログラムに名前が並んで出たことから平田さんが書いたいろ〳〵のものを讀んだりして因縁淺からなく思つてゐました。それが偶然——しかも同じ船でホノルル、へペンの出稼ぎに行くのですもの。

私達はよく談じ、よく笑ひました。

そして奥女史に敬意を表すべく寄せ書きをすることに一決しました。平田さんはそこで一生懸命に同封の稿をやつと昨夜から今朝にかけて脱しました。

私は食物の關係からかすつかり身體が變で困つてゐます。それもその筈です、神戸を船出して以來日本食を喰べないのですもの。何だか細胞組織が變つたようです、肉食をすれば色が白くなるといひますがこの頃はこんがり焦げて日本へ歸るころにはハワイ生れの日本女學生のようになつてゐることでしよう

太平洋の浪路はるけくして、おもひも遠く日本の空にこの拙いおたよりをいたします。

初秋微韻

生田花世

夏の末から秋のはじめにかけて、いかにもその季節にふさはしい小さな一つの『生産』がはじまる。高く立つてゐるとうもろこしの葉と葉その間で……。それはだん〴〵にふとりだん〴〵にふくれて豐滿になつてゆく。頭上の髮は、十分の成熟を示すための紅色を示し、青い皮の下では、その青みがかゝつてゐた實がやゝに白みをましまるみをます。

成熟しきつたあのとうもろこしを、その莖からもぎとつてあの薄い綠の皮を一枚々々めくつてゆくと、やがてその中から、みがかれたやうな乳白色の小粒の實を階律正しく幾十列にまとめた美しい肉體が現れて來る。たとへて見るとそれは、海の泡――貝殼から生れたといふヴヰナスの芳烈な女體の香を放ち、またそれは、牝鹿の柔かな眼つきをもつ。

『私はかうしていゝでせうか。私は何かにかくれたい。うすものか、もしそれがないならば、あなたの指へ、もしおほつてくれるものがないならば、あなたの唇に。たゞぢつとかうしてあらはなのはたへがたい』

わが身邊の記

奥むめお

市内に一圓タクシーが非常に殖えました。さきを急いで歩いてゐるとき、客待ち顏の圓タクがブーブーと、カラ自動車を走らせてゐるのを見ると、ほんとうに癪にさわるつたらありません。先日も、日日新聞社の前あたりにカラ自動車が十數臺もならんでゐるのを見て、

『こゝが消費經濟ですわ、忙しい思ひをして歩いてゐる人がゐるのに、こんなにして自動車を遊ばせておくのは勿體ないぢやないの、乘つてやりませうよ』

と村山さんが云ふと、すかさず大坪さん、

『留つてゐるのは未だしも、客もないのにブーブー走らせてゐる方が、もつと勿體ないぢやないの。『ストップ』と手を揚げてあの自動車を留めて、乘つてやりませうか』

實際、今の世の中では自動車が早く疾つて客に便利を與へるといふ、本來の目的を失つてし

裸身になつたとうもろこしの可哀さうな哀訴の無韻の聲は、新秋の、夜の卓上にかそかに漂ふ。

あまりにもあらはにされて据ゑられてゐることは、美しいものにとつてもたへられないものである。かくれてそつとしてゐたかつたものを。

秋は來たのか、まだ來ないのか、暑さはましてゆくのか、それとも涼しさがましてゆくのか、都の一日は暑い日であり次の一日はやゝ陰欝にくもる。

しかし、海から、又、山から、昨日今日歸つて來た、色のやけた避暑かへりの人々にきくがよい。彼等は答へるであらう。

「田舍はもうすつかり秋ですよ」

彼等避暑がへりの人々は、あの秋めいて騷立つ野の風に吹かるゝ芋の葉や、もう穗の出るのにちかい稻の葉のにほひをおもひ出すやうな眼つきで語る。汽車の窓から見下した海邊の町々、小さな村々の初秋のながめをおもひ出すやうな表情で語る。

「東京はまだあついのねえ……」

そのあつい東京でくらしてゐたものにとつては、今年なんか、梅雨の上りがわるくて、太陽の黑點のおかげか何かしらないけれども、曇り日つゞきでむし／＼する日が多かつたので、あの眞夏らしいカツとした爽かな夏の暑さが味へなくて妙なものだつた。

避暑に行つた人こそほんとの暑さを味つたであらう。また暑くてこそ清水のやうに味へる秋風をも滿喫したであらう。

秋あたらしく野を吹く風は野の家のほとりに一列に立ならんでゐるとうもろこしの濃い綠の上皮を吹く。上皮はその風にこたへるすべをしらない。けれども、

まつてゐるのであります。一遍走つて一圓、或ひは三哩走つて一圓、といふ鹽梅に、たゞ金儲けの道具になつて走つてゐるだけであります。

從つて、どんなに急ぎの用事を持つて驅け出してゐる人がそこにあつても、一圓フンパツするのでなければ、自動車はカラッポのまゝブー／＼ガソリンを費消して走つてゐるとも、その人を乘せてはくれません。不經濟、不親切な世の中でありますね。

小學校の先生といふ、二重人格者生活の足を洗つて、せめて夏休みだけでも、胸をひらげて人間らしい生活を味つて歸りたい、――かういふ手紙をよせて、廣田たか子さんは上京してみえました。去年もおとゝしも、やはりさういふ氣持で、氏は京都一燈園で托鉢生活をされたさうであります。

然し私は云はずにゐられませんでした。教員の生活にあつても、なぜあなたのほんとうの生活を、そこにきづきあげてゆかれないでせうかと。形式だけかへて外に移つたところで、どれだけそこに、あなたの全一な生活を築きあげられるでせうか、と。

私は、托鉢生活のダイゴ味を未だ知りません然し、農村で女教員をしてゐる者ならば、子供

その葉と尖端にふさふさと盛り上るうすべにいろの髮の毛がゆすられてゆするゝ……垂れ下りつゝ、搖るゝ……。

あのとうもろこしの實から、あの紅い髮の毛をはなして考へるとは出來ない。あのうすべに色の髮の毛がやゝちゞくれてそのひたひを飾るは快活な處女美に見えるなづると少しねばりを持ち、さゝげると少しつやをもち、もつれると少し影をもつそのうす紅色の髮の毛は、いちらしくて丈夫に育て上げた美しい女の子、その母親に喜ばせるゆたかな髮、秋のよろこびをうたふ秋の髮。

幼い時分にはどんなことでも、それがだれにおそわつた事でもないのにほんのなんの氣もなくして見るものである。いくつものとうもろこしのうす紅色のその髮の毛を取りあつめてそれをむすんで、ももわれにゆつておかつぱの頭の上にのつけて、人に見せてはうれしがつたやうな思ひ出が私にある。私が今夜買つて來たとうもろこしのほぐれたそのうす綠色の姿の上に、さうした思ひ出の夢をゆめ見てゐる時に私の側に居る女の子の云ふことには、

『私の田舍では男の子が、とうもろこしの毛を集めて鼻のあなに入れてちんとのばし、兩手をひろげて大人のやうに歩いたのです……』

「くちひげね……」

と云つて私が樂しく笑つた時に、それを聞いてゐた人が、かるい愉快な氣分だつたので、その女の子の言ふやうに、そこばくのそれをとつて自分の鼻にさし入れてひどく私達を笑はせてくれた。

『さあとうもろこしを燒いて下さい。燒けて、こいきつね色に成りましたところどころ黑くもなりして、にほひはあの味覺

たちのかはいさうな生活、その親だちの貧窮を毎日目の前にしてゐ乍ら、そこに現實の問題を見ず、京都まで托鉢しに行つたエゴイストの生活。もつと、敢へ子の中にとけ入つてゆかなければ——。子供と共に、子供の親たちと共に、その貧しく苦しい生活に對して、現在の社會組織の歪みに腹を立てなければ——。

第一、一個の婦人として考へても、男子と並んで、職業生活についてゐれば、その處が因襲の根深い農村であれば、なほ更ら、女であるがために、あなたを虐げることが隨分多かろうに、なぜ、その足もとの現實の問題に冷淡なのでせう

私は、さう云はずにゐられないのでした。

今の事務所の家賃が二十五圓、私は家主への拂ひをすますごとに、金子が煙に消えたかのやうにやりきれない腹立たしさと、惜しさを感じないでゐられません。それに先月まで、『婦人運動』の保證金として一、〇〇〇圓番融臨に入れてある金子(債券)を高利で借りてゐたので、毎月十八圓づゝの利子を、どうしても支拂はねばなりませんでした。

まわりには失業したり、病氣したり、子供が多すぎたりして困つてゐる人が、隨分澤山にあるし、あれもこれもと、したいと思つてゐる仕

をしげきする強い香ばしさで、田舎の樂しかつた昔の秋を私等の心によびかへすでせう。」

「わたしがやいて參りませう」

と、今皮をむいたとうもろこしを臺所の方へ持つてゆく女の子のいそ〳〵とした心持の中にも生れた故里のとうもろこしが秋風の中に立つであらう。

田舎に生れたものでなくては、秋風に吹かるゝあの葉のひろいとうもろこしのきづゝけられない秋の夢は理解しがたいものであらう。都の町の夜店の灯の下でとうもろこしをみつけた。それはうれしくもありかなしくもあつた。

愛しき記録

英美子

日向が慕たはしくなつて來た。さういへばつひ此間まで聞こえてゐた杜の蜩の聲もしないではないか、いつか秋にはいつたのだ。よそのコスモスはもうずつと以前から咲いてゐるのに、うちのはやう〳〵二三日前から咲き初めたばかり。氣をつけて見ると蕾の先がどれも〳〵南へ〳〵と向いてゐる。是は最早、風の吹き方が暑い頃とは大分違つた來た證であらう。何處の家でも追々と西北の窓を閉す日が多くなつてゆくのであらう。

朝からの日向を惜しんで南の椽に、ありたけの座布團を列べて置いたのが、心持よく膨くらんで呉れた。信(三歳)はその空間々々を軌道として、積木の汽車を走らせるのに餘念がない。男の兒は幼い

事も隨分多くて、金子がないために出來ないでゐる私たちにとつては、高利貸に拂ふ利息なんてそんな金子は一文も出ない筈なのにと、口惜しい〳〵と思ひつゝ私は、六年間といふもの、ずつと拂られて來ました。恐しいものですね。勘定してみると、合計一、五〇〇圓ほどの利子をこの貧乏なふところから、捻り出してゐるのです。

無産政黨が、新聞雜誌の保證金制度、立候補者の保證金制度を全廢せよ、とつねに叫んでゐます。實にかういふ、金を積まねば新聞も雜誌も發行することならぬ。代議士にも縣會議員にも立候補することならぬといふ規則は、不オントウであります。私たちもかういふ惡制度撤廢のためには、大いに加勢しなければならぬと思ひます。

幸に今度、贊助員千葉とみ子氏が債券をユーズウして下さつたので、十八圓の利子支拂ひの要がなくなりました。いつも月末に內容證明のサイソク便が來た習慣が今でも殘つてゐて、今でも月末は薄氣味惡く、愉快でないほどですがほんとうに肩の荷か下りました。あと、家賃も出さないでいゝやうに、早くなりたいものであります。金子は有用に生かして使ひたいものであります。

時から矢張り動的の玩具を好むものだ。いたいけな口で、ビイーッ・ウエノー・ウエノー息を切つて信はた車を押してゆく私は雛物を傍にのけて立ち上つた。

――おかあちやまが乗つてあげませうか――

私は人指しゆびを一本、小さな客車の上に輕るくのせた。可愛ゆき車掌は、林檎の畑に得意滿面。積木の汽車は都合よくすぐに動き出した。ビイー・ウエノー私はかくて座布團のめぐりを幾めぐり還い歩いたことか、可愛ゆき汽車は走つても／＼上野である。私は小さき列車の屋根越しに四ツ目垣のすきまから畑の大根や小松葉のみづ／＼しさを眺めやつた。私は假に少しばかりの畑が、欲しくなつた。

「車掌さん、お母ちやまと一緒にお畑しませうよ」

私は先夜、緣日で買つて置いた赤いシヤベルを戸棚から出してやり、庭下駄を突つかけて緣の下から、名ばかりの安ものゝ鍬を引きだした。

「どれ、いゝいゝおはしよりして上げませう」

ニヨツキリと象のやうに肥つたもゝをからげてやると、先刻迄の氣取つた車掌君は、小春日の中に、もうすつかり小さき百姓の姿になつた。私の掘りかへす土の後から／＼、赤いシヤベルが從いて來る。積木の汽車はいつ迄も「上野」に停つてゐる。

――附　記――

これは私の或る年の秋の日記の一節であります。この中にある信と申す私の愛兒は、この後半歲ならずして亡くなつてしまひました。私は一週間ばかりは殆ど夢遊病者の如く家の中にゐたゝまれす、外をうろついてゐました。

製糸工女十年の私の生活

美濃部みの子

私も『婦人運動』の讀者の一人として皆樣から日々指導して頂いてゐます者で、毎月の御誌でどれだけ力づけられてゐるかわかりません。

……

私はごく貧しい小作農夫の長女で、二十四歲です。きやうだい三人兩親も揃つて圓滿な家庭に幸福に育つて來たのですが、打ちつゞく悲況に尋常科を出るとすぐ工場にやられました。その頃は組合製糸が出來たばかりで（自分の家で作つた繭を村の娘が、組合の工場で糸にすること）工女と云へば人間でないやうな侮りをうけ

此の頃になつてやうやく骨に浸潤する程の哀愁から、靜かなる祈りへと出て參りました――。

むめおさん。今日途上ではからずも貴女に御目にかゝつて歸宅し、机邊の過古の日記をふと開きましたら、この「愛しき記錄」がありました。先刻、少しの時間を歩るき〳〵「子」といふ問題に就いてお話し合つたことを玆にくり返し思考しながら此の粗稿を差上ます。

――一九二八・七・下旬――

母子草

村山文子

疲れ果てゝ歸りし子らを愛の手に
　抱きしめ給ふ母欲しとおもふ

ふだんは、さして心にもかゝらずにすごすことが多いのだけれど、さて何事か起ると先づ第一に心に浮ぶのは亡き母の俤である。

先達ての晩も奥さんのお伴をして、降りみ降らずみの空模樣を氣にしながら小石川の高臺にS先生をおたづねしたときのこと。七十を越されたと云ふ先生の御母堂が、いろ〳〵とおもてなし下さつたので、母のない私共二人はしみ〴〵と、

「先生は御幸福でいらつしやる事」

と羨ましく話しあつた。そして奥さんも、

「せめて今まで母が生きて居てくれたら少しは喜ばせる事も、樂しませる事も出來るのにね」

てゐた頃ですから、當時十四の私に、それがどんなに辛かつたか知れません。

クラスの友だちが、進んで上級の勉强をしてゐるのに、自分は家が貧しいばかりに生活費を稼ぎに出なければならぬ。……友だちからかけられる三度の言葉も、二度に減り三度の手紙もだん〳〵一度になつて、自分の境遇がおちぶれてゆくにつけて、私の頭の中には貧富の間のミゾがだん〳〵深くなるのでした。でも、友だちに敗けてはならぬと思つて、人にかくれて勉强をしたし、私の行末を惜しんで下さつた先生に夜學で勉强したいと賴みましたが、その頃の工場の制度は、今とは比較にならぬほど悲慘だつたので出來ませんでした。(今では夜學もあり會員を女工にした修養會もあつて、みんな工場にゐて修業してゐますから、餘程いゝ方です)

それからずつと、去年まで工場にゐたのですが、私の勞働生活は――私は考へてもゾツとします。亂暴な言葉使ひ、みだれた風氣、男工との淫らなつきあひ。私はそれらをみてゐるに耐えられずに何遍、工場を逃げ出したかしれないのですが、その度に父の怒りを增すばかり、それからずつと貧しいし、ウヤムヤに押へられて來てしまひました。

ちやうど去年の八月に突如、百人餘りの女工

と、しんみり述懐されたのだつた。

その時私は、何時もそんなことには無關心のやうな奥さんの心の中に秘められた尊い光に打たれやうに思つたのだつた

それは私にしても、

「母が生きて居てくれたら……」

と思はない事はないのだが、その願ひはたゞ、

「母が居てくれたら、かうもして貰へるだらう。甘へてもみたい」

といふ風に母のある友達の幸福さをうらやましく思ふ心で一杯で、母を喜ばせるといふ事は殆ど含まれて居ないと云つてもいゝ。たゞ、自分本位の願ひから、「母に求める心」だけで「母に捧げる心」が缺けて居た。もとより、

「もう二度とあんなわがまゝをして、母を困らせるやうな事はすまい」

などゝは思つても居るのだが……。

そして或夕方の事務所の光景が、ゆくりなくも私の胸に甦へつて來たのである

「けふは紀伊ちやんに、早く歸るつて云つて來たから、お先にごめんよ！」

と云つて奥さんが一足先に歸られると私はその母心のあたゝかさを尊く思ひながらも、つひ云ひ知れない羨ましさに似た感じを覺えて、一人ぼつちになつた事務所のたそがれのほの暗さの中で、だまつてぢつと〳〵考へ込んでしまふ。

「母親——子供——家庭——團欒——」

私の頭にはつぎ〳〵とさうした事が浮んでは消え、消えてはまたあらはれる。

もう奥さんは電車に乗られたかしら？

紀伊ちやんが玄關にとび出して、

「かあちやんおかへりなさい！」

つて、とびついて居るだらう。そしてみんなで樂しくお夕飯を食べるだらう、などゝ思つてみる。

が同盟罷業をしました。村初まつての大事件だつたと云ひます。三年間修養會の會長をしてゐた私は、危險人物として村からにらまれるやうになりました。原因は、一、工賃の値上げ、二、現業員の女工に對する不平等を、改めさせることなど十二項の願書を作つて出したのでした。私たちの結束があまり堅かつたので、餘程えらい人が調停に立つてくれたのでしたが、そのまゝ六日間ストライキをつゞけました。目的は達せられて、現業長一人と見番一人とやめられましたが、現業長は村の出身だつたので可なりもめました。

罷業側からも、犠牲者を出すと云はれてゐたのも、團結がかたかつたため許しませんでした。……

その年はゴタ〳〵の内に終りましたが、今年の職工募集期に、私と今一人は美事に首を切られてしまひました。村の校長が非常に骨を折つてくれましたがだめでした、今は爭議首領として村の者からも白い眼でにらまれてゐます。私は女工ではなくて、糸の檢査係事務係だつたのです。大勢のためと思つてやつたことが、自分の首を切られる結果になりました。然し私は初めから犠牲心をもつてやつてゐたのですし、目的の一つ一つが達せられて、機械も改良された

そこで、あはてゝ仕事を片付けて、重い足を辿りつゝさびしい家につく。しかし、家に歸つても、迎へてくれる母がないのだと思ふと、みんなが喜びいさんで家路につく夕方が、私には一番淋しい悲しい時なのだ。

　かうした心持はとても云ひあらはせないし、又話しても分つてはもらへないのだけれど、でも矢張私一人の胸に包んで居るに耐へられなくなると、つひ知らず洩らしてしまふ事がある。何て弱い心なんだらうと、自分の姿を哀れに思ふ。だけれど、

　かにかくに夕べはさびしかへるべき
　　母のふところなしと思へば

　最近特に「母性愛」といふ言葉が、さかんに叫ばれて居るが、それについて今でも思ひ出す毎に、痛い所をえぐられるやうな思ひ出がある。と云ふのは、私共の學校では毎年六月二十五日を「母の日」としていろ〳〵な催しが行はれるのだがその日は私にとつて一番つらい日の一つだつた。

　當日は寮舍でもクラスでも、友はみな母への手紙を認めて居る。母に對する感謝の言葉が述べられ、母の歌が歌はれる。あちらでもこちらでも、目に映るもの耳に聞えるもの凡てが、

「母！　母！　母！」そして強く鋭く、

「お前は母なし子！」

「お前の母はもうこの世には居ないのだぞ！」といふ聲が、私の周圍に充ち滿ちて居る。

　思はずかたく耳をふさいで、友の群からはなれて、たゞ一人でその日を泣き暮したのだつた。そして、「まあなんて、慘酷な催しだらう」と、呟いた。

し、女工も組合員も、村の人も工場について大分考へてくれるやうになりましたから、私は心ひそかに喜んでゐます。

　近ごろ、村から少し離れた獨立製糸に、やはり貧しいために資本家のドレイとして、勞働してゐます。

　今は、父が病氣で歸宅してゐるのですが、妹と二人でかせぐ少しばかりの工賃は、父の藥代にもなりません。自分ながら不がいないことと思つてゐます。

　誌代も、切れてゐるのですがそんな事情ですから、もうしばらくまつて下さい。休讀するのもあんまり惜しいので、どうぞ待つて下さい。

……(下略)

▽

トン子「おばちやん、おばちやんは、なぜ、お顏に白いものをつけるの」

「綺麗になるやうに」

「だけど、なぜ綺麗にならないの？」

婦人消費組合協會便り

婦人消費組合協會主催の講習會では、大坪さんを初め三原さん加藤さんらが、例の調子で忙しくやつてゐられます。講習生の方との親しみも餘程深くなりましたし、みなさんも、比較的熱心に、戸越支部の如きは、八月一杯の豫定だつたにも拘らず、九月もひきつゞいてやつてほしいと云ふ希望で、多分さうなるでありませう。瀧ノ川の組合では、女工として晝間働いてゐる娘さんが、和服裁縫の手ほどきから習ひに來てみえるのもあり、子供の眠りについたあとで驅けつけて來てミシン使用法を稽古しい／＼子供のエプロンや割烹前垂を縫ふことをたのしみに一生懸命にやつてゐられるお母さんもあります。その他、フランス刺繡、編物も、可なり希望者があつて、いろ／＼考察しては、いろ／＼に作つてゐられるのは、はたの見る目も嬉しいものであります。

一方で、奧さんや、神さんや、上田さんや、西川さんや、松岡さんや、前田さんや、その他、總がゝりで、外の道から、受講の方に親しくなつてゆくためにそれ／＼働きかけてゐて下さいます。殊に、これから秋に向つて天氣がよくなつたら、この方を大いに働かねばと、みなさんで意氣込んでゐらつしやいます。

かと思ふと、加藤さんは、例の調子でコツ／＼と働いてゐられるのでありますが、夏物の材料の仕入れが手おくれになつてこりたのに鑑みて、早や、毛糸や、冬物の材料仕入れに力を入れてゐて下さいます。秋に入ると共に、殊に編物の講習會は方々で要求されるにきまつてゐるし、時節柄としても、大いに婦人の集合を催して、婦人問題のいろ／＼についてみんなと一緒に考へる機會を作りたいと思ひますので、その方面の準備をおさ／＼怠りなくやつてゐます。みなさんもどうぞお加勢下さいませ。

なほ、協會として重要な關心は、自分たちが消費經濟の運動についての根本的な理解をもつこと、消費組合の實際にもゝつと深く接觸してゆかねばならないこと、各自の生活——殊に家庭の管理を何とかもつと合理的にし、能率をあげるために、とも／＼に考へ、出來ることならば、自分たちの實際の生活

婦人消費組合協會便り

から割出して、これこそと思ふやうないろ〳〵なゝ案を作りて早く一般の家庭婦人の參考までに發表したいと云ひ合つてゐます。この方では特に丸岡さん、西川さん、神さんらが委員になつてやつてゐて下さいます。全く、家庭婦人として、特に消費者として私たちが第一に考へてゐなければならぬかういふ方面の問題が、これまで一般婦人たちから、最もおろそかに忘れられてゐたといふ事は、何といふ重大なあやまちであつたことでせう。

これからぼつ〳〵研究調査に着手することにして全て前述のやうな部門の婦人として特に考へておきたいいろ〳〵の問題を網羅して、主婦のための展覽會、消費經濟展覽會を開いて一般の家庭婦人を大いに誘ひ合せて、見て貰ひ考へて貰はうでありませんか、と先達ての會合でさう決定いたしました。何分にも研究調査の生活からずつとへだゝりのある家庭の雜役にばかり沒頭してゐた主婦の私たちにとつては八十の手習ひ式ですが、然し學生が机上に家政學を專攻するのとはまるでその趣旨がちがひます。一つ〳〵私たちの日夜頭を惱まし、心を痛めてゐる問題についての、血と肉のついた研究題目であつてみれば私たちの生活のある限り、かういふ問題の研究調査に打こんでみたい考へは誰しも同じでありますまいか。みんな、さう話し合ひつゝ、とにかく最大の馬力をかけてやることに決めた次第であります。

幸諸官省や學校や公共團體や特志の研究家のもとに專問の立場からそれ〳〵收集されたいろんな資料が、今日では可なり澤山にあります模樣で、從來棚につみ重ねられてあつたさういふ參考資料が見易くわかり易く整理し、手入れをして、風通しをするつもりで一般の家庭婦人にお目にかける取次役をも併せ行ひたいものと考へてゐます。

編輯者からのサイソクが矢の如く急で、今月はおち〳〵考へて書くひまもございません。地方の婦人會のみなさん、せひ、婦人の協力で行ふ仕事をかうした消費經濟方面に成るべく傾注して、多くの家庭婦人の生活に最も當面した問題を通してお仕事を進めて行つて下さいませ。

農村でみて來た二つのこと

奥むめお

私が最近招かれて行つて來て、印象の深かつたことの二つ——

一つは、山梨縣甲府市外の常永村の更生振り、一つは、秋田縣の南縣一帶にわたる自動車利用組合のはたらきである。

〔常永村公會堂〕　村へ入るとすぐ、この大きな公會堂に驚かされてしまふ。村民の協力で凡そ二萬圓の金子をかけて（勞力奉仕）この公會堂は出來たのだといふ。月に一回乃至二ケ月に三回位の割で、敎育的映畫のフキルムを借り入れて、村でそれを行ふ。この村から甲府市まで出かけるのに、往復四十錢の自動車賃がかゝるのであるが、それだけの金子で家族全體が有益に遊べるやうに、講話會や講習會や、雄辯會や、映畫會やをつゞけてゐるのだとのこと。從つてこの公會堂に對してはお婆さんも、子供も若い衆はいふに及ばず非常に親しい心で集つてゆくので、何の催しでも、會場は一杯になると聞いた。私は、總同盟の赤松常子さんと二人で、消費組合運動の準備會のために、行つたのであつたが、多くの農村で味はねばならぬやうなあの、もの珍しさうな聽衆はなくて、子供を負うたおかみさんも、孫の手をひいて來たお婆さんも、娘さんも、みんなが、場なれた調子で私たちの話を聞いてゐられるのが、むしろ不思議であつた。

公會堂で、村會も、農會も、組合會議も、婦人會も行はれる。柔道のお稽古場もちやんと出來てゐるし、さゝやか乍ら圖書室の備へもあつた。山梨縣全體の農民組合の狀勢が一目で分るやうな一覽表には、組合のある處には組合旗を立てた地圖があつた。

縣の豫算、村の豫算の一覽表も中々親切な分りやすいものが貼つてあつた。

婦人會も、臼井竹じさんらが中心になつて大分盛んにやつてゐられるらしい。講習會や講演會には大分、女も出かける樣になつたですが、もう少し女の手で協力して働いてゆかねば——と云つてゐられた。活動寫眞でもある時は、下足番も婦人會がやり、お茶や、お菓子等を婦人會でとりよせて賣つて、幾分の儲けを會の積み立て金に、加へてゐるさうである。

元來、この村は、古くから農民運動の盛んであつた土地で——といふのは、小作人が地主からひどく苦しめられてゐたために、割合に早く團結して、一致行動をとることが出來た、と組合長の臼井次郎氏はいろ〳〵の述懐

と共に云つてゐられた。今日では地主は、押へるだけ押さへてしまつてゐる。村會議員も二十五人の内二十人迄を、農民組合から出してゐる。この上は、生産と消費の合理化運動に依つて、村民の生活をもつと向上させてゆくのだと村の有志は、非常な意氣込みで抱負を語つてゐられた。

〔自動車利用組合〕 これは主唱者、赤阪基君の居住地である田澤湖畔西明寺村から、トラツク『農民自動車』を乗出して、沿道の人々のいろ／＼な用事を達して歩くのである。賣り込み、買出し、運搬、なんでもこの自動車が通る道筋へ、用事を書き出しておくなりブー／＼と音が聞こえてから、驅け出して行つて、『酒を五合買つて來てくれ』とか、『この米を賣つて來てくれ』とか頼むのである。

田圃で働いてゐる者が、自動車の音を聞きつけて、あちからもこちからも驅つけて來てくれるときと、澤山の買物を積んで村へ入つてゆくときとの、うれしさは、口では云ひあらはせないなあ、と、でこぼこの村道を、心を使ひ／＼運轉し乍ら、さう話してゐられた。

學校へゆく子供でも、お婆さんでも、爺さんでも、てく／＼歩いてゐるのを見ると氣の毒になつて、自動車にあきがあればいつも乗せて運んでゐるとのこと、そして、まぐさでも、苅り入れた收穫物でも、豫め云つてくれば、道ばたにつみ上げておけばそれを、運んで指定の場所に納める。

村の人たちが、町まで買物にゆく必要が大分少なくなつたし、苅り入れたものを背負つて運ぶ心配がないので、仕事が大いにはかどるとの事で好評であつた。

一體村では一軒々々の距離が、近くないから、消費組合の運動も、まづ運搬配達の方法をちやんとしてからでないと、やりにくい。この點を考へたから、初めこの『農民自動車』をよく利用して貰つて、ゆく／＼消費組合、販賣組合、利用組合等をやる一つの大きな、協同組合にしてゆきたい抱負でゐられる由。

戰爭反對！ 英國婦人消費組合大會のさけび！

去る七月二十五日擧行された、英國消費組合婦人ギルド大會に於て、一千名の婦人代議員が六萬一千名の會員を代表して、出席したが、同席上國際聯盟がソヴィエットロシアが提案した軍備の卽時撤廢案を、それが眞に平和の爲めであることは、何者にも明かなるにも拘らず、何等の顧慮をもせず否決し去つたことは不當である、と大いに非難した。『世界の平和をやぶるには一つの火花が、爆發すれば充分である』と絶叫して今にも戰爭の起りさうな事情を語り、この時に當つて軍備撤廢に反對するのは、全く國際聯盟を形成してゐる各帝國主義國家の支配階級が、其野望をみたすために、無産大衆の窮乏と困惑と勞働とを犠牲としても弱小植民地國を倒し、又世界の勞働者農民の幸福のために、あらゆる努力を惜まないソヴィエット・ロシアを打ち倒して、世界の資本家階級の私慾を滿たさうとすることの不當をせめたてた。尙ほ同大會では英國の各無産政黨に對して、前記ソヴィエトロシアの軍備撤廢案を支持し、後援する政策をとれと決議した。

センチメンタリストの手記

並木琴子

ながいこと思ひつめてゐた高原の彼女の家に、私はとふ／＼辿りついた。

彼女は、殊更晴やかに私を迎へてくれた。

「ね、私もう、すつかり疲れて仕舞つたの」

私は、むくんだ重い足をなげ出して、すくひをもとめるやうにいつた。

「わかつてゝよ、ホラ、この廣い綠色の絨氈……これはあなたのために、この間夕立屋に頼んで洗つて置いたのよ、自由に休んで頂戴な」

「有難う!!」

私は言もなく、只もう私の小さい全身をピツタリ投げ伏せて、ドレイのやうに彼女の莊麗な裳を讃歎した。

「あなたは、私の家がそんなにお好きなの」

彼女は、木の葉型の茶碗に、彼女の涙じやないかと思ふ、ポッチリした飲物をはこんで、私にたづねた。

「えゝ、勿論よ、冬さんのホワイトハウス春ちゃんのフラワーハウス、夏子さんのホツトハウス……みんないゝけれど、あなたのお家はもつと／＼私をチャームするの」

彼女は私の言をきいて俯向いた。

私は、彼女の中に不可解な謎を見た。

私は言の代りに？ のついた眼を、彼女の上にぢつと投げつけた。

彼女は、それを知ると無言のまゝ強く／＼首をふつた。

「……」

何もきくまい……きくまい……きくまい……私は、そふ自分の心にかたく誓つた。

二三分の後、彼女は私に微笑みかけていつた。

「ね、何でもないことなのよ、人間つてね、いつでも私の氣持のいゝ日は、限り

なく私の美をほめてくれるけれど、私が暗いかほをすると誰一人ふりむいてくれないのですもの、人間つて全く勝手なのよ、自分一人で勝手に私を慰めの道具にし樣とするのだもの、私、あなたもやつぱりそんな方だらうと思つたら急に悲しくなつたの、たゞそれ丈けよ、えゝ、もうなんでもないの」

彼女ははにかみながら、併も強い語調でつゞけた。

「私はね、みだりに瞬間のみを享樂する人々は嫌ひなの、誠意のない同情の言——私大嫌ひ、私はあなたの無言を愛するわ、不用意な駄辯、……私ダキしたいの」

×　×　×

私は、三月程彼女の家に逗留した。

彼女と私とは、常に無言の生活の中に尊敬と愛を交した。

或時は小鳥を追ひまわし、或時は七草をたづねまわつて餘念がなかつた。

私たちはいつも、下界の人間たちがまだ口をつけない新しい空氣を呼吸し、そして疲れる事を知らなかつた。

私は、彼女の態度に冬子の一家族との交代の近づいたのを知つた。

「左樣なら!!」

私は彼女の裳に最後の頰ズリをして、彼女からの土產ものを懷におさめると、その夜のうちにコツソリ山を下りた。

×　×　×

×　×　×　×

朝

楢瀬　春美

稻の穗は出揃つた
葉の露は眞珠と光る、
冷氣地上にみちみち
大陽まさに生れんとす。
電線に並ぶ燕は語り
鷄は夜明けを讃美する、
山の端の外燈は白く光り
農夫幾人稻田に動く。

かへりみる日

今井邦子

愚しきをみなのもてるまごゝろはかへりみられぬ世となるとかも

なまけゐて針もたぬとにあらねども針みなさびてとぐ日さへなし

冬したく夏に仕上げておほはゝの秋蠶もかひぬかへりみる日や

かぶきりの少女のころにあつめたるお伽繪草紙二冊まだあり

ひとりして一生をとうす此友におもひはつきぬたのめしてあり

品ひくき龜戸町やもの古りしみ寺に近く三味線きこゆ

信濃富士見にて

雜木山やま道のぼり歸りゆく小學生を見送りにけり

烙印されたる苦艱(八)

(ある婦人革命家の一生)

ヴェラ・フィグネル手記
大竹せい抄譯

冬宮爆發

やがて、ペテルブルグでは大事變がおこつた。

前にもいふとほり、モスクワ、アレクサンドロフスカヤ、オデッサ等の郊外で鐵道爆破の計畫をしたほかに、委員會はペテルブルグでも、更にひとつの劃策をしてゐた——それはアレクサンドル・クヴヤトコフスキーが、かねて私にほのめかしてゐた劃策である。

當時、非常に教養のある人民の意志黨員となつてゐた勞働者、指物師ステパン・ハルトゥーリンは、アレクサンドル二世帝にたいして、委員會のさだめた革命的行動を實行するために、冬宮内に指物師として住みこんでゐた。

ハルトゥリンは、宮殿内の部屋の配置や、宮内官吏の生活狀態を研究した上で、たくみに下級吏員に接近し、とう／＼彼れと同じやうに宮殿内の地下室に住んでゐた皇宮憲兵の氣に入られ、その憲兵は、ハルトゥリンを娘の花婿候補者に見立てるほどになつた。

かうした準備をして、すつかり周圍の信用を得ておいてから、ステパンは、委員會からうけ取つたダイナマイトを少しづゝ運びこんで、地下室の道具箱の中へかくしておいた。それが人目に立つほど蓄積され、この上持ち込むと捜索されるかも知れないと思はれた時、いよ／＼實行にうつることゝなつた。

一八八〇年二月五日、バッテンベルグ大公がペテルブルグ

へ到着の日に、ハルトゥリンは宮殿の食堂を地下から爆破して、食事にそこへあつまつた皇帝の全家族を、その賓客、陪食者を灰燼の下にうづめる手筈になつてゐた。

そして、彼れはその通りに實行した。彼れは、時間をはかり、導火線の長さをきめてダイナマイトにつなぎ、それに點火して、そこから立ち去つた。

丁度、皇帝の家族たちが食堂へはいつたその瞬間、おそろしい爆破がおこつた。地下室のすぐ上の一階は、滅茶々々に粉碎されて、そこにゐたフインランド聯隊の儀仗兵五十人は無慘に全滅した。――が、その一階うへにあつた食堂まで破壞するためには、ダイナマイトの分量が足りなかつた。で、食堂はそのまゝで、たゞ震動のために食器が床に落ち散つただけであつた。皇帝の家族は、微傷だも負はなかつた。

このために、ローリス・メリコフ伯の獨裁が宣布された。ムロデツキーは伯爵を射擊した。そして三、四日の後、捕はれて英雄的な微笑と共に處刑臺の露と消えた。これらの事件は極度に社會を震駭せしめた。政治的な自由をもたず、反動勢力にたいしては不滿を抱いてゐながらも、政府と鬪ふほどの勇氣のない消極的なこうした社會の多くの人々は、專制政府の壓迫に反抗する戰士たちの黨を、不審と感激とをもつて眺めたのである。

流刑や、投獄や、死刑によつて、黨のエネルギーを根こそぎ搾み涸らさうとしたが、それは駄目であつた。この壓迫のもとで、次から次へといろ／＼な稀有の事變が續出した、革命家たちは、化學や電氣の力をかりて、皇帝列車を爆破したりした。社會そのものが無氣力であり、朦昧であればあるほど、そのために一層、社會は、革命家たちのエネルギーや考案や決斷力に驚嘆した。われ／＼自身が失敗になやみ苦しんでゐる時、われ／＼の周圍では、委員會の名聲がます／＼高まり、その行動の結果は青年たちの頭を眩惑させた。その事件の華々しさに、世間は失敗のことなどは忘れてゐた。

「自分たちの方へ全世界の眼を向けさせる――それは既に勝利を意味するではないか。」

二月五日事件が、ヨーロッパにあたへた印象に意氣あがれる「土地改革」派の領袖たちは、外國からわれ／＼にさう書き送つてきた。

人民の意志黨の委員會や、黨にたいするかうした態度はます／＼強くなつて、遂に、一切の行動を結合せる三月一日の

最高頂に達した。社會は、帝制政府が何を與へるだらうかを待つのでなく、革命の力が何をなしうるだらうかを期待したのである。

四月二日事件、十一月十九日事件、二月五日事件等は、その頃もし人民の意志黨の委員會と全組織とが、その破壞的行動をやめるやうなことがあれば、必らず何らかの、別の義勇的團體があらはれて、皇帝××の使命を負つて立つにいたるだらうと思はれるほど、社會の空氣を沸騰せしめてゐた。新らしい××計畫は全く不可避であつた。そこで執行委員會はこの仕事を自から引うけて起つたのである。

一八八〇年の三月乃至は四月に、はじめサブリン、それからペロフスカヤ女史がオデッサへやつて來た。ヤムスカヤ街の私のところへやつて來たこの人たちは、皇帝がクリミヤへ避暑にくる機會をとらへて、オデッサで××の準備をするため、委員會から派遣されて來たと言つた。

私は、その時オデッサ縣總督の右の腕として內政一切をきりまはしてゐたトトレーベン伯の秘書長パニュチンにたいするテロルの準備に忙殺されてゐた。彼れは二十八人裁判で五人を絞首すると共に、オデッサに戒嚴令を布き、市會を、一八七一年のパリ・コンミユンと同じものだと言つて蹴散らし、引つゞいて敎員、文筆家、大學生、官吏、勞働者たちを手あたり次第に檢擧追放した。それらの人々の家族にたいする彼れの態度は冷酷をきはめた。

私は、このパニューチンにたいしてわが黨の武器をさし向けやうと考へたのである。そのため、まづパニューチンの役所のあるソフイスカヤ街へ人を住はせ、彼れの人物や生活狀態を硏究させた。ところが、それは何の效果もなかつた。といふのは、誰れもその時パニューチンの顏すら知らせることが出來なかつたからである。その後、一人の靑年が、私に彼の顏を知らせてくれたばかりでなく、彼れが何時も出かける散步の道筋と、一定の時間を話してくれた。私はそれから每日、二人の私服に護られた、彼れの同じ姿に行き逢つた。私服の一人は彼れと並んで步き、一人は四、五步あとから尾いて行つた。

この仕事の實行者は、やがて見つかつた。彼れは、パニューチンの或る散步の時を選んでナイフをもつて彼れを刺すといふことになつた。すつかり時と場所がさだめられ、暗殺實行者が逃げおほせるために、私はいゝ馬を買ひとゝのへた。

ところが、ペロフスカヤ女史が委員會の命令をもつてやつて來たのだ、この計畫はそのまゝに放棄することになつてしまつた。

ペロフスカヤ女史は、ジェリャーボフから勞働ワシリーに宛てた手紙をもつて來てゐる。そして彼れをこの計畫に參加させることが出來るかも知れないから、一度逢つて見たいと私に言つた。このワシリーは、その後オデッサで彼れの知つてゐる全部の勞働者と、二十人裁判で自分者同志スヴェデンツェフ派の黨員を賣り渡したメルクーロフであつた。最後にまた彼れは、一八八三年二月十日にハリコフ市の街上で私を捕へたのである――二十年の懲役に處せられたかの如く見せかけて、彼れは、實は私を捕へるために特にハリコフへ派遣されたのであつたのであつた。私は、この人非人とペロフスカヤ女史の來る前に知己になつてゐた。彼から石の彫刻を習はうと思つてゞある。そして他の連中から正直ないゝ若者だといふ噂を聞いてゐたからである。そこで、ペロフスカヤ女史と彼れを逢はせるのは、何の雜作もなかつた。彼らは數日のうちに會見した。

サブリンとペロフスカヤ女史は、暗殺にたいして、すでに決つた計畫をもつてゐた。彼らは、皇帝を通過するチャンスのもつとも多い通路を選び出さねばならなかつた。そして、その町で小賣店を手に入れ、夫婦の形で商賣をしながら機會をまつことになつた。そしてモストワヤ街の一軒の小店の中から爆彈を投ずることに決定した。この案は、その後ペテルブルグのマーラヤ・サドワヤ街で實行されたやり方である。この計畫の技術的方面は、その後間もなくヤキーモワ女史と一緒にやつて來たグリゴリイ・サエフが指導することになつてゐた。

ペロフスカヤ女史は、金をもつて來なかつた。彼女は、私たちと一緒に、この仕事の豫算を立て、それを委員會におくり、その上で現金をうけ取る筈になつてゐた。われ〳〵が計算をして見るとどうしても千ルーブル以上を要するといふことが判つた。私は、この暗殺計畫に要する資金を自分で都合するから、送る必要はないと委員會へ提議した。そして私は店や商品の買入れ、それから參加者の給養などに費やされた約九百ルーブルを、幾度かにわけてペロフスカヤ女史に渡した。

爆彈の製作中に、イサエフはあやまつて自分の指を三本飛

ばしてしまつた。彼れは、それを平氣で我慢してゐたが、われ〳〵は非常におどろいて、入院させることにきめた。そのため發覺をおそれてすつかり準備されてあつた品物（ダイナマイト、硝酸、火藥など）を私の家へはこび移した。そして私の家で準備をつゞけてゐた。

やがて、皇帝がリワヂヤ（クリミヤ南海岸の避暑地――譯者）に行くといふ噂がぴたりとやんでしまつた。――と、間もなくわれ〳〵は、委員會から、準備を撤回するやうにといふ命令をうけ取つた。

その時、われ〳〵は、今までの準備をトトレベン、パニユーチン爆殺に利用することを提議した。けれども、委員會は今まで準備した手段は、特に皇帝のために行ふ手段だといふのでこれを否決し、何らか別の手段で伯爵の暗殺を許可するといふ通知をして來た。（つゞく）

雨に流れた富士登山

流行の登山熱に浮かされたわけでもないのですが、この間から誰いふとなく『富士山へ登らう』と云ふ議が出て、みんな大喜び大贊成。『わたしは肥つてるから駄目でせうよ。あんたたち若い者同志で行つていらつしやい』。と至極あきらめのよい奥さんをも、なだめつすかしつ、つひに『では行かうかねえ』と云ふところまでこぎつけて、あとはお天氣のよくなるのを待つばかりとなりました。

中には『私はまだ富士山を見た事がないので、毎日お勝手で、すり鉢をさかさにして、その上にうどん粉をかけて、こんなものだらうかと想像して居るんですよ。』と云ふ心細いのや、『はるばる東京へ出て來た記念に、せめて日本一のお山へ登つてみやげ話にしませう』と云ふ殊勝な人もあつて、毎日旅行案内や地圖と首引で大騒ぎを演じました。

ところがそれから毎日々々の雨で、おまけに何だかうすら寒いやうな陽氣になつて來たので氣が氣でありません。と、ある日、『富士山はとても寒いんですつて。それに、山は荒れて居るさうだから、今年は止めて來年にでもしたらどう?』と奥社長が持ちかけて來ました。すると丁度その晩から、すりばちになぞらへてまで、富士山にあこがれて居た○さんが、急性リウマチとやらにかゝつて、たう〳〵すつかりおながれになつてしまひました。『おや〳〵殘念だなあ』と思つて居ると、折からJOAKの放送が聞えて來ました。『JOAK、只今からニユースを……富士山を始め日本アルプスの山々は急に氣温が下り、降雪甚だしく、富士にはみぞれが降つて居ります。登山者は各登山口とも石室に七十人位もあつて、みな寒さにふるへて居ります。』何が幸になるか分りませんねえ。（ふ）

●●●●●●●●バートランド・ラッセル氏曰く 私は此の素晴しく大膽な本を讀んで深い感銘を受けた。茲に初めて婦人に關する眞實が語られたのだ。頗る意義ある作品である。

女

マグダレン・マルクス著

山田わか譯

●●●●●●●●ロマン・ローラン氏曰く それは大天才の創作だ。力ある作品だ。

●●●●●●●●ヴィクター・マリゲリット氏曰く 此の美しい本は偉大な個性を否認する事の出來ない保證だ。

婦人評論家として知られた山田わか子女史が佛蘭西の閨秀作家であり兼ねて共産黨員として活躍してゐるマグダレン・マルクス女史の創作を譯されたものである。單に一人の男性を對象とせず萬人の男性を愛する事が新時代の戀愛だと喝破し女性として或は母性として一々鋭い内省のメスを振ひ女の赤裸々な魂の正體を最も大膽に

四六判四〇〇頁

定價一圓八〇錢

送料（書留）一八錢

描寫し歐洲の讀書界を震駭せしめ本國の佛蘭西では羽が生えて飛ぶ様に賣れ到る處で盛大な講演會が開かれ凡ゆる著名な哲學者、批評家、小説家から熱狂的賞讃の聲を浴せられ今や爭ふて各國語に飜譯されつつある世界的空前の名著である。新時代の婦人を語る者は先づ本書を繙け。

東京麴町 下六番町

平凡社

電話九段 一六六四番 三六四七番 三四七五番

振替東京二九六三九番

私たちの生活

松本正枝

働いて、病氣して
なほつて、働きすぎ
又病氣になる
あゝその連續が
私共の生活だつた。

あゝけれども　私共は
病氣などになつてやらない
三日か四日わづらつた藥代に
醫者は私が十日も十五日も
働いた米代を奪つてしまふ
病氣の起るわけが解つた

私達はもう病氣なぞしてやらない。
雇ひ主はわたし達の力を
出來るだけ値切つて買ふ
そして出來るだけ多く使ふ。

過　勞！

これが病氣の起りだ。

勞働全收！

私が働いただけのもうけが全部社會全
體のうるほいになるならいゝ
金持だけの贅澤と
よりはげしい、より巧妙な
搾取の材料とならねば。

一九二八。八月。

ユナイテッド・アーチスツ會社提供
メトロ・ゴールドウイン・メーヤー映畫

ベン・ハー　全十二巻

「基督の物語」



原作　陸軍大將ルウ・ウオーレス
映畫化　ジユーン・メシス女史
監督　フレッド・ニブロ氏

役割

ベン・ハー　ラモン・ノヴアロ氏
メッサラ　フランス・ブッシユマン氏
エスサー　メー・マツカヴオイ孃
マリア　ベテイ・ブロンソン孃

これはベン・ハーの物語、兼ねてキリストの一代記。

時は紀元前、ヘロデ王の時代、ローマの勢力旭の昇る如き頃ほひ、イスラエルの國ユダの里に、ベン・ハーと呼ぶ青年があつた。年十六のある朝、幼友達のメッサラに巡り會つたが、メッサラは年十九歳、今ローマの武人となつてゐる。故に其の身の榮達を誇り、ベン・ハーを嘲けつて、ローマ人にあらざれば人にあらず、と云ふ氣色を見せた。ベン・ハーの心は燃え立つて、奮然猶太民族のために起つべき決心をする。

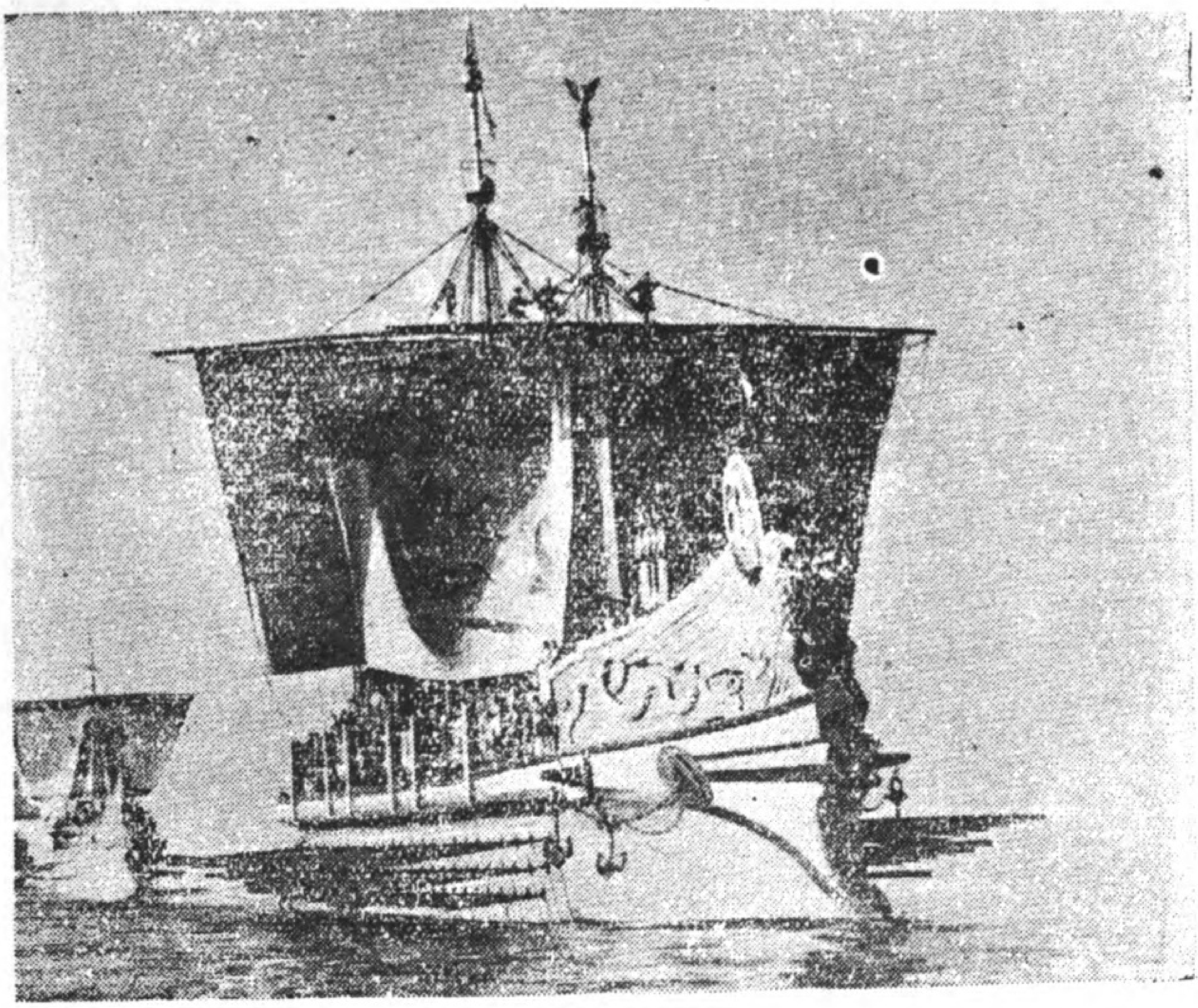
折しもローマの執政グロータスが、此の地方に赴



任して來た。其の行列の日、ベン・ハーは自宅の高樓から其の行列を見物してゐたが、過つて塀の煉瓦を通りへ落した。煉瓦は行列中のグロータスに當つて微傷を負はしめたので、ローマ人は直ちに激昂してベン・ハーを捉へ、あまつさへ其の母と妹とを捕へる。捕へに來た人こそ意外にも、ベン・ハーの幼友だちのメッサラではなかつたか。

ベン・ハーは、身を奴隷の境遇に落され、笞と鞭の苛酷な刑に處せられる事になつた。次いで軍艦の漕ぎ手となつて苦難の長い〱月日を送つたが、彼の反抗的精神と猶太民族のために盡さんとする誠心とは絶えず燃え熾つてゐた。艦隊の司令官アリウス將軍は端なくもハーの志の奪ふべからざるを知つて、私かにベン・ハーを救ふ決心を定めた。

時に海賊の一群は、ローマの大海軍を襲ふた。敵味方入り亂れての大激戰に、宛然修羅の巷と化し去つた海は、忽ちローマ軍を全滅せしめた。たゞ生殘つたは將軍アリウスとベン・ハーの二人。アリウスは危急をベン・ハーに救はれて生き長らへたのであつた。波浪の間を漂流する事暫くにして、二人はローマの援軍に救ひ上げられた。アリウスはベン・ハーの功を賞して奴隷の境遇を脱せしめ、終に己が養子と定めた。ハー



の生涯は急に明るくなつて來た。

然しローマに於ける豪奢な生活も、不幸にしてベン・ハーを喜ばせなかつた。彼は、自分と同時に捉はれたまゝ行方の知れぬ母と妹の事が氣になつて、徒らに其の消息を得やうと力めてゐた。終に自ら養父とローマに別れをつげて母と妹を求める旅に出發した。

行方定めぬ旅枕重ねて、ベン・ハーはアラビアに辿りついた。彼は此處で昔の老僕シモニデと其の愛娘エスサーに巡り會ふ。エスサーの清さ美しさは、ベン・ハーの心に光と熱とを與へた。エスサーも亦彼れを憎からず思つてくれた。其の邂逅の夕まぐれ、一人のアラビア酋長はベン・ハーの到着を聞いて、明日催さるべき戰車競爭の選手になつてくれと切望した「相手は?」と訊けば「ローマのメツサラ」であるとの答、ベン・ハーは雀躍して喜び其の選手たる事を承諾した。思へば昔年の怨みを晴らすべき日は翌日となつたのだ。ローマ人に非されば人に非ずと稱したメツサラに、眞の猶太人の力量勇氣を見せて、宿怨を報ずる時は來たのである。ベン・ハーの身體中には、溫い〳〵血が漲り渡つた。

明くれば戰車競爭の當日である! 數萬の觀衆の凝視を浴びて、ベン・ハーとメツサラとは戰車を馳せた。たゞ見れば何の奇もない競爭ながら、これはローマ民族と反ローマ民族と



の競爭に外ならず、從つて陰々たる殺氣は場を鎖して、人も馬も狂はんばかり。ましてやベンとメッサラとは、必死の唇かみしめて只管先陣を爭つた。メッサラは奇計を案じてベンの車を顚覆せしめやうと計つたが、反つてベンの堂々たる馭車に敗れ、競爭場の土を血にいろどつて無殘の最期を遂げて了つた。

凱歌はベン・ハーのものとなつた。然し、ハーは此の土地に止り、戀人と共に偸安を貪るやうな人間ではなかつた。直ちに義軍を募つて、恰もローマの壓迫のため磔の刑に逢はんとするキリスト――一世の救主であり奇蹟の行者たるキリストを救はんと道を急いで立ち去つた。

ベン・ハーがゴルゴザの山の麓にたどり着いた時、キリストは十字架を負ふて、刑場へ赴く途中であつた。キリストはベン・ハーの救ひを謝絶して、山へ急ぐ。其の時病める二人の女がキリストの前に跪いて病を癒し給へと祈りを捧げた。キリストの力は二人の姿を健康な姿に引き戻す。見ればそれは久しく求めて得られざりし、なつかしき母と妹である。嗚呼、ベン・ハーの喜び如何ばかり。

キリストは處刑せられた。世界は救主を失ふて悲しみなげいたが、、、、、神は遍く惠みを垂れ給ふて、ベン・ハーにもその母や妹にも、將又戀しいエスサーにも、否、世界中の凡ての人々に、靜かな朝を迎へさせ給ふた。終り

婦人界近事

二業地許可問題に婦人側起つ

大阪で婦人矯風會その他の婦人團體が、一緒になつて、住吉區高とうろう四方に許可された料理屋指定地及び、飛田遊廓の解放に、猛烈な反對運動をしてゐる一方、東京でも故近中野、池袋、小山、立川、南千住、王子の六ケ所に許可された二業地(その內二ケ所は三業地)反對の運動が熱心につゞけられてゐます。(二業地といふのは、料理屋と藝妓屋、三業地といふのは、それに待合を加へたもの)

大阪の松島遊廓の移轉問題にからまつて、松島事件といふ疑獄が起つて、箕浦勝人、高見之通氏をはじめ、床次若槻その他政界の巨頭連が引合ひに出されて、度々取調べられてゐたことは未だ、我々の記憶に新らしいのであるが、いつもかういふ問題には、政治家がそのウシロで、利權あさりをしてゐるものです。それは、二業地三業地の許可を取ればその地代が急にあがるので、その地方の土地持は一躍して數千金儲かるわけですから、相當の運動費をバラ撒いても、當局又は政治家を買收して許可して貰ふやうに、運動するのであります。

前內閣の警視總監が辭職する前の日に、八ケ所の二業地を許可して批難されたとき、今の宮田總監が、抗議に來た婦人團體代表者に言質をとられてゐたにも拘らず、一、當該町村に於ても、隣り合つてゐる各町村からも猛烈な反對があり、二、すぐ近くに小學校を初めいろんな學校が並んでゐる、三、而も、中野町の如きは、十町、さきには既に營業してゐる二業地がある、四、規定は人口四五萬以上の町村といふのに、立川町は二萬足らずしかない。かういふ不當の場所に、許可を與へたといふ事に對して、婦人は特に、一般子女の教育、社會の風教といふ事を無視しても、少數の地主や政治家の要求にあつては、一たまりもなく二業地を許可するやうな、現在の制度に對して、充分覺悟をきめて鬪はねばなるまい。

女子高等教育問題

女子教育振興委員會及び、女子高師卒業生の團體たる櫻蔭會では、次のやうな建議書を文部大臣に提出した。

政府が、來年度より開設すべき文科大學理科大學に、女子高等師範學校卒業生の入學を許すことを至當と認める、のみならず右大學に家政科を設置して、女子高師卒業生の研究に便せられるやう、希望いたします。

又、右の會は、明年度より昇格すべき東京廣島の兩師範大學に女子も、入學する事が出來る樣にと、當局に陳情した。

男女均等賃銀制

『同一の勞働に對しては、男と女に同額の賃銀を支拂ふ樣に、制度を確立しなければならぬ。』といふ要求があちこちから出て來ました。勞働總同盟關東同盟會婦人部委員は、この問題のために、全ての勞働婦人團體と提携して大いに運動しやうと準備中であります。女がどんなに安い給料にでも、甘んじて雇はれてゆくために男子の、職業をどんどん奪つてゆきます。又、どんどん男子の賃銀までも引下げてしまふ結果になつてゐるのです。その結果は、男女全體の勤勞階級り相場を安、

するばかりになるのですから、この運動はぜひ目的を貫徹するまで男女、協力でたゝかつてゆくべきであります。

非戰同盟成る

世界平和、戰爭に絕對反對の同盟が出來ました。賀川豊彦氏が主唱で、無産團體はこぞつてこれを支持することに決しました。婦人團體は云ふに及びません。國をあげて軍國主義戰爭氣分になろうとしてゐる此の際、婦人の立場から特にこの運動は、熱心にたゝかはれなければならぬものと思ひます。

藝娼妓にも貞操あり

故後藤象二郎伯の嫡孫にあたる某を、相手どつて新橋藝妓のぶ葉が、婚約不履行に依る損害賠償及び、慰藉料三萬圓請求の訴訟を七年越しつゞけてゐたが、いよ／＼のぶ葉の勝訴と決つた。但、金額三十圓。

この判決によつて、これまで全然その貞操價値をみとめられてゐなかつた、藝娼妓のそれが、みとめられる事になつたのであるから大なる進歩だといはれてゐる。

東京市會の疑獄と婦人

東京市會の新しい疑獄として、板船權補償事件、京成電車の市内乗入事件が問題になつてゐます。東京では、市會議員なんてどうせ惡いことをするものさ、といつた輕侮で彼らが、利權あさりをするのは當然だといふ風に一般の市民がアイソづかしの結果、左程驚かないほどになつてゐる様ですが、これで立派な自治政治が、いつ出來るか不安なことであります。婦人市政研究會、社會婦人同盟、その他の婦人團體が、盛んな運動を開始しました。

板船權といふのは、大震災の年まで日本橋にあつた魚河岸を、築地に移したことについて魚河岸へ損害賠償を、東京市から出すといふことで、百萬圓の要求を七十萬圓に低げて東京市會は今年の春可決したのでしたが、その裏面には十萬圓の運動費が、市會議員を買收して贊成させるために、使はれてゐた事實がこの程暴露して、醜類が檢事局にて調べられてゐるのであります。この時の市會に、議員の手當値上げ案をも出してゐたのですが、輿論の反對が、この問題に集中してゐるスキに手當値上げを否決して、彼等の名目を立てゝおく一方で、バタ／＼と補償案を可決してしまつたし、又、あとの批難をおそれて無記名投票にした程計畫的に、この惡事を、市會は行つたのであります。

京成電車市内乗入れについても、かういふ事は前例にない事で、もつと莫大な數十萬の運動費が使はれてゐるといふのであります。何れも、運動費に數十倍乃至數百倍する儲けが確實なものですから、金子の前には目のくらむ市會議員どもを買收して、其目的を達したわけであります。

鐵道現業委員會に婦選

鐵道現業委員會の代議員選擧に、婦人の選擧權が認められて出札係も、掃除夫もみな、二十三日に全國一齊に投票をした。

無産大衆黨を支持する婦人同盟

さき頃誕生した無産大衆黨を、支持する婦人團體として、無産婦人政治研究會が成立した。この團體は、各無産政黨の統一合同のために最も熱心に働きかけるとのことである。



今年は文豪トルストイの生誕百年目にあたるので、本國のロシアでは大々的に記念祭を催す準備中だと聞きます。わが日本からも、昇曙夢氏が招待されて出發されました。寂しい寒村の一小驛に行き倒れてついに死ぬ瞬間まで「如何に生くべきか」に惱み苦しんだトルストイ、わがトルストイが現代人に與へた影響は實に大きなものでありました。『三つの死』は翁の短篇の中でも有名なものであります。

三つの死

レオ・トルストイ作
加藤一夫譯

一

それは秋であつた。二つの馬車が大通りに沿うて走つて居た。初めの馬車には二人の女が坐つて居た。一人は瘦せた蒼い貴婦人であつた。今一人はその召使で、輝かな赤ら顔をした、でぶ〳〵に肥つた女であつた。彼女の短いパサ〳〵し白た髪の房は、色ざめたボンネットの中からはみ出て居た。やぶけた手袋に包まれた美しい手が苛立たし氣にそれをなほした。襤褸で覆はれたふくれた胸は健康な息づきをして居た。そのすばやい眼は、窓から急ぎ過ぎゆく野をちらと見たり、主婦の面を無遠慮に瞶めたり、馬車の隅つこのところを落着きながら眺めたりした。召使の直ぐ鼻ツ先きで、主婦のボンネットは馬車の網棚の上でブラ〳〵と搖れた。彼女の膝の上には小さな狆狗が寢て居た。彼女の脚は車床の上に置かれて居る小箱の上に載せられて居るので高まつて居た。そしてその上をコト〳〵と打つ足の音は、車の旋條の轢りや窓硝子のガタ〳〵云ふ音の間にも聞かれた。

兩手を膝に、眼を閉ぢて、主婦は後ろに積み重ねられて居る座蒲團の上で靜かに揺れて居た。そして始終咽喉の中で咳をしつゞけながら微かに眉毛に皺をよせた。頭には白い寢帽を冠り纎細い頸には靑いハンカチーフが捲きつけられて居た。寢帽の下に消え入つてゐる眞直なわけ筋が、彼女の非常に滑かな油を塗られた金髮を分けて居た。そしてその太いわけ目のところの皮膚の白さには、何かかうパサ／＼した死の様なものがあつた。しなびた、いくらか黃色な皮膚は纎細な美しい顏にいくらかたるむで懸つて居た。頰や顎は桃色をして居た。彼女の唇は乾いて落着きがなかつた。彼女の旅行服は彼女の萎縮した胸の上に折目正しくして蔽はれて居た。その眼が閉ぢられて居たにも拘らず、主婦の顏には疲れと、苛々しさと、惱みとが見えて居た。

馭者臺に坐つて居た從僕は居睡をして居た。馭者は烈しく叫びながら、その丈夫な、汗をかいて居る四頭の馬を鞭打つた。そして時々同じ様に烈しく咆えて居る彼の後の馬車の馭者を振り返つて見た。

迅速に回轉して居る護謨輪の車輪が、廣い轍を大通りのネバ／＼した泥濘の上に殘して行つた。空はどんよりとして冷たかつた――冷たい霧が野原や道を包んだ。馬車の中はオデコロンや塵埃の臭ひでもつて息づまる樣であつた。病める女は頭を後ろに垂らして漸々に眼をあけた。彼女の大きな眼はきら／＼と光つてゐた。そして非常に美しくて黑い色をして居た。

「またこれだ。」と、その美しい瘦せ衰へた手で、彼女の脚にちよい／＼觸れる召使の下袴の隅を腹立たしげに押しやりながら言つた。そして癇性に口を尖らせた。召使は自分の下袴をその兩手で摑んで、しばらくは頑丈な脚で立つて居たが、少し離れて坐つた彼女の活々した顏はそれで赧くなつた。病人の美しい黑い眼は召使の凡ゆる動作をしつツこく追うた。それから馬車の座席に兩肱をたてゝ身體を持ち上げようとしたが彼女の力ではそれは駄目であつた。彼女の口はまた尖つた。そしてその顏全體は力のない腹立たしい嘲笑の表情をおびた。

「すけてお呉れよ、お前！　いや、可い／＼、そんな用はない。私は自分で出來る。たゞ後生だから私の後ろへこんな

枕を置かないでお呉れ。何しろ私に少しも觸らないで居てお呉れ。もし解らなきや。」

主婦は眼をとぢた――かと思ふとまた直きにその眼瞼をあけて召使を見た。召使はそれを見返して美しい下唇を嚙んだ。深い溜息が病人の胸から出た。しかしその溜息は咳の中に消えた。彼女は側を向いて眉をひそめた。そして兩手で胸を掴んだ。咳が止むと、彼女はまた眼を閉ぢて、じつと坐りつゞけた。馬車と幌馬車とは村に入つた。召使はその短衣の下から太つた手を出して十字をきつた。

「どうしたの。」と主婦はきいた。

「停留場でムいます。奥樣。」

「なぜお前は十字をきつたのだ、と私は訊いたのだよ。」

「教會の前を通つたのです。奥樣。」

病人の窓は方に向いて、病人の馬車が丁度今その周圍を通つて居る大きな村の教會を大きな眼で眺めながら、ゆるやかに十字をきつた。

馬車も幌馬車も二つながら停留場に止つた。幌馬車からは病める女の夫と醫者とが出て來た。そして馬車の方へやつて來た。

「如何です、只今は。」醫者は彼女の手をとり、脈を診ながら訊ねた。

「少し疲れやしないかねお前。」彼女の夫は佛蘭西語で訊いた。「出たくないかい。」

召使は膝掛に注意しながら出來る丈け會話の邪魔をしない樣に隅の方にくツついた。

「さうでもありません。大したことはありません。」病人は答へた。「私は出ますまい。」

夫はちよつとの間立ち停つて居た後、停留場の中へ入つた。召使は馬車から飛び降り、爪先き立ちで輕やかに歩きながら泥濘を越えて戸外に行つた。

「私の氣分が勝れないと云つて、あなた方が朝飯を御あがりにならないと云ふわけはありますまい。」と病人は、馬車の窓のところに立つて居る醫者に向つて、微かに笑ひながら言つた。「誰も私には關つて呉れはしないのだ。」醫者が音も立てずに彼女を離れ去り、そして山猫の樣に停留場の階段をかけ上るや否や、病人は附添へて言つた。「あの人達は達者だ――だからみんな同じなのだ。おゝ／＼。」

「ねえ、エドアルド・イワーノウヰチ。」夫は醫者に會つた時、愉快な微笑をもつて腕を抱きながら言つた。「私は一杯註文したんです。何うですね、あなたは。」

「おゝ、それは結構です。」醫者は答へた。

「彼女は何うでせうね。」夫は溜息をつき、聲をひそめて、眉をあげながら訊ねた。

「とても伊太利までは行かれますまい――モスクワまで行ければいゝが――特に此の天氣ではねえ。」

「おや。おや。ぢや。何うしたらいゝんでせう。」――夫は手をもつて彼の眼を掩うたが、「此處だ。」と彼は飲物を持つて來た男に言つた。

「そのお考へは斷念しなければなりますまい。」醫者は答へた。肩を聳かしながら。

「しかし、ぢや私が何うしなけれやならないのですね。」夫は言ひ張つた。

「私は彼女を止めさせようと思つてあらゆる手段を講じたんですよ。私は私の財産のことから、私達が後に殘して來なけれやならぬ子供達のことから、そして私の仕事のことなどを話してきかせたのです――だのに彼女は何もきゝ容れないんです。彼女は宛然まつたく健康者でゝもあるらしく外國で住まうと云ふ計劃をたてるのです。で、彼の女の本當の狀態を話さうものなら――左樣、彼女を即刻殺してしまふ樣なものでせう。」

「奥樣はもう死んで居るのも同然だと云ふことをあなたは知らなけれやなりませんよ。ワシリイ・ドミトリイチ。肺がなくなつては誰も助かりツこはありませんからな。肺が二度と出來はしまいしね。傷ましい悲慘事です。しかし何とも仕

樣がありません。今のところ、貴方及び私のなし得るところは、たゞ、此の先きの途を出來るだけ樂にしてあげる樣に氣をつけることより外はないんです。今はもう坊さんの役目なんですから。』

『あゝッ、私が彼女の最後の思ひについて語る事が什麼だか貴方にはおわかりでせうな、什麼ことがあつても私はそれを彼の女に告げることは出來ない。あの女はあんなに美い女だのに……』

『でも、あなたは今まで止まる樣に說きふせて見なけりやなりませんよ。』醫者は頭を意味あり氣に振りながら云つた。――『それから道がわるいだらうと云ふことを。』

『アクシユーシヤ・アクシユーシヤ。』驛長の娘が叫んだ。頭にショールをかけながら、そして泥まぶれの裏梯子を驅け降りながら『來てシルキンスカーヤの奧さんを御覽。何でも胸の病氣のために外國へ行らつしやるんださうだよ。わしはまだ肺病やみを見たことがない。』

アクシユーシヤは閾を跳び超えた。そして二人は互に手に手をとつて門の方へかけ出した。二人は步調をゆるめて、馬車の側を通り、そして開き窓の中を覗き込んだ。病人は顏を二人に向けた。しかし彼等が物好きにキヨロ〳〵して居るのを見て顏をしかめて橫を向いた。

『まあ？』と、驛長の娘はすばやく頭を向け變へながら叫んだ。『どんなに綺麗であつたか知れないのに、今ではまあ、恐ろしい位ね。見えて？ 見えて？ アクシユーシヤ。』

『そして何てやせてるんでせう。』アクシユーシヤは調子を合せた。『いらつしやいよ。も一度あの側まで行つて見ませうそして井戶へ行く樣な風をしませう。あれ、あの人はあちらを向いてしまつたわ。でもよく見えるわ。あんまり惡るかなくつて、マーシヤ。』

『さうね。だけどまあ何て泥だらうね。』――かくて彼等は三人とも門を通つて走り歸つた。

『屹度私はこわく見えるのだよ。』と病人は考へた。

「おゝ、何うしても急がなければ。急いで外國へ行くんだ。さうしたらそこで私はまたよくなる。」
「何うだね今は。」馬車の側へ來ながら、そして何か少し噛みながら、夫は訊ねた。
「何時もおきまりだ。」病人は考へた。「何れにしても、あの人の食慾にはかはりがないと見える。」
「何うもありません。」彼女は齒の間で呟いた。
「ね、私はお前が旅行のためにすつかり惡くなりやしないかと心配して居るんだがね。ことに此の天氣では。それにエドアルド・イワーノウキチも同じ樣なことを云ふんだ。何うだね家へ戻つては。」
彼女は餘りに腹をたてゝ物を云へなかつた。
「天氣は間もなくよくなるだらう。旅行はのばすことも出來るんだ。そしてお前はその時もつとよくなるだらう。——吾々はみんな一緒に行つていゝ。」
「御免なさいな。もし私が今までにあなたの被仰ることをきいてばかり居ませんでしたら、私は今頃は伯林に行つて居て全くよくなつて居るんですよ。」
「何うしようつて云ふんだ。私の天使さん。そんなことが全く出來ないのはわかりきつてるぢやないか。だがお前が、さうだ、ほんの一月、うちに止まつて居たら、お前はずつと快くなる、私は私の仕事を仕上げる、そして吾々は子供を連れて行くんだ。」
「子供たちは達者ですが私はさうぢやありません。」
「だつて、お前、まあ考へて見るがいゝ。この天氣では、まあ、お前が途中でわるくなつたと想像する……だが、うちに居ると、兎も角も……」
「うちで、え。私はたゞうちで死ぬんです。」病める女は感情的に答へた。
しかし死ぬと云ふ言葉は明白に彼女を驚かした。——彼女は默り込んだ。そして哀願する樣な何か訊きたいらしい眼

で夫を視た。彼は眼を落して默り込んだ。病人の口は急に子供らしく尖つた。涙が彼女の眼から流れた。夫は手帛で顔を掩うた。そして默々として馬車を出た。

「いや、私は行く。」病人は眼を夫に向けながら言つた。そして腕を組み、とりとめもなく呟き初めた。

「何うしてかうなんだらう。何うしてかうなんだらう。」彼女は曰つた。そして涙が益々烈しく流れた。

彼女は長い間そして熱心に祈つた。しかし彼女の胸は依然として病んで苦しかつた。空も、野も、道路も、何もかも依然として灰色で陰氣であつた。そして秋霧が深くもならねば淺くもならず、以前と少しも變りなく、道路の泥濘の上にかゝつて居た。また小屋の屋根の上にも、馬車や、強い愉快な聲で話し合ひながら車の輪に油を注いだり、新しい馬をつけ代へたりなんかして居る馭者の、羊の毛皮の着物の上にも。

二

馬車の用意は出來た。しかし馭者はまだぐづゝいて居た。――彼は停留場の待合室に入つて居たのだ。人間や燒きパンやキャベツや羊皮の臭で充ちて居る驛室は熱くて息苦しくて暗くてそして重苦しかつた。かなり澤山の馭者がその居間に居た。料理人は煖爐のあたりで忙しかつた。そして煖爐の上には羊皮を被つた病人が臥て居た。

「フエョードル小父やい、フエョードル小父。」羊皮の上衣を着、帶に鞭を挾んで居る若い男が室の中に入つて來て、病人の方に向ひながら叫んだ。

「何をしようてえんだ、おしやべり。フエョードルに何の用があるんだ。」と他の一人の馭者が訊いた。

「馬車が手前を待つてるのを知らねえのか。」

「俺や靴を借りようと思つてんだ。自分のがやぶけたからなあ。」髮の毛を後ろに撫でやり長手袋を帶の間にねぢ込みながらその男は答へた。「おい、フエョードル小父、おや睡てえのか知ら。これ、フエョードル小父!」煖爐の方に進んで

行きながら彼は繰返した。

「何だい。」と力のない聲が響いた。そして、痩せた赤鬚の顔が煖爐から上げられた。廣い、血の氣のない、毛が一杯に生えて居る痩せた手が、垢だらけのシャツでやつと掩はれて居る骨と皮ばかりの肩の上に、餘程の骨折りでもつて駱駝の毛織物を引きよせた。「何か飲むものをお呉れ、お前。何用だね。」

若い男は水差しに水を一杯入れてもつて行つてやつた。

「ねえ、フエディア。」ちよつと立つて居てから彼は云つた。「お前もう新しい長靴は用がねえだらう。俺らに呉んねえな。だつてお前にやもう用がなからうもの。」

病人はやつれた頭をチヤンのかけた水差の上に垂れながら、濁つた水に薄い垂れ下つた鬚を浸しながら、力よわく然しガブ／＼と飲んだ。彼のグヂヤ／＼した鬚は清潔ではなかつた。彼の落ち窪んだ濁つた眼は非常な骨折りでもつて若い男の顔を見上げることが出來た。

水から口をひきとつてから、彼は彼の手を上げて濡れた唇を拭はうとした。けれど、力が足りなかつた。そこで彼は毛皮外套の袖口で拭いた。默つて、そして鼻で重い息をしながら、彼は彼の全ての力を集めて若い男の顔を眞直に見た。

「誰にもやるつて約束してないんだんべ、あるのけ？」青年は言つた。「若しさうだつたら、えゝだよ。たんだ困つたこたあ、戸外が泥だらけなんだ。ところが俺らは、そこで働かなきやなんねえんだ。で俺等は自分で云つたのさ。――フエディカに云つてあの靴をもらはう、もう用がねえだらうから、――つてさ。だけどお前要るんだらう、なあ。」

病人の胸には何かこみ上げて來てゴロ／＼云つた。彼は身體を曲げてひどい咳をし始めた。そして容易にそれを止めることが出來なかつた。

「ほんとにさ、あんなものお前さんに何の用があるもんかね。」腹立たしくそして不意に、料理人が嗄がれ聲をたてゝ叫んだ。彼女の聲は部屋中ひゞいた。「お前さんはもう一月以上も此の煖爐にこびり着いて居るんだよ。ねえ、見ねえよ、

すつかりカタナシぢやないか。そしてあんなぢやどんなに身體の中をいためるか知れたもんぢやねえ。何んで彼が新しい靴なんかいるものかね、まさか墓の中まで埋めてもらはうて云やしまいしさ。それに今は、もう、神樣あ、俺がさう云ふことの罪を許して下さる時なんだよ。まああの咳をするのを見なあよ。他の部屋か、何處かへ連れて行かなきやなんねえよ。何でも町には病院があるてえことだが、だつてそれが何になるんだね。どの隅々までも滿員さ。彼の人も運動はしてみたんだよ。兎に角お前を入れて呉れる室はないんだよ。それだお前さんの樣なきたないものは御免だとよ。」

「おゝい、セリヨーガ、早く行かないか旦那樣方はお前を待つてゐるんだよ。」驛長の聲が戶のところで叫んだ。

セリヨーガは答をきかないで行きたかつた。しかし彼は、たえず咳をして居る病人が何か云ひたさうにして居るのを見ないわけには行かなかつた。

「長靴をもつて行つてもいゝよ。セリヨーガ!」咳をおさへ、少し樂に息をしながら彼は言つた。

『だがね。俺らが死んだ時にや石塔を買つて呉れるんだぞ。』彼は唄がれ聲でつけ加へた。

「有りがたう、おやぢ! ぢや俺らはあれをもらつてくよ、アヽ。そして石塔をな、アヽ。いゝとも〳〵、買つてあげるよ。」

「これ、お前たちはあの男の云ふことをきいたか、子供たち。」病人は言葉を出すことが出來た。しかし直きにまた俯伏してしまつた。むせかへして來た咳で息づまりながら。

「さうだ、約束だ。俺等がきいてゐる。」馭者たちのうちの一人が曰つた。

「おい、セリヨーガ、早く來ないか。」驛長はまた中を覗きながら言つた。「サルキンスカーヤ夫人は病人でゐらつしやるぢやねえか。」

セリヨーガは彼の大きな破れてふくれた長靴を脫いで腰掛の下に投げ込んだ。フエヨードル小父の靴はわけもなく彼の足に合つた。そしてセリヨーガはそれを眺めながらそこを出て、馬車の方へ行つた。

「こいつあいくらか長靴らしいぞ。一つ磨いて見やうぢやないか。」セリョーガが馬車臺に乘つて手綱をとつた時に、手に靴バケを持ちながら馭者が云つた。「手前それをたゞせしめて來たのか。」

「美しいだらう？、どうだね。」セリョーガが言つた。立ち上つて脚の周圍の毛皮外套の裾をなほしながら、「さあ、それぢや出かけるんだ、別嬪さんたち。」と彼は馬に叫んで鞭をあてた。そして馬車と幌馬車とは旅人とトランクと包みとをのせて、濡れた道に沿うて、灰色の秋霧のうちに消え去つた。

　病氣の馭者は息づまつた室の煖爐の上にとゞまつた。そしてもう咳もしないでドッコイショと向きかへつて、靜かにして居た。

　夕方になるまでも人々はその中に入つて來ては出て行つた。そして何か食べた。その間ぢゆう病人は一ことも語らなかつた。日暮になつてからコックが煖爐のところにやつて來た。そして彼の脚からカリツフ（羊毛の上衣）をとつた。

「怒らないでおくれ、ナスターシヤ。」病人は呟いた。「どうかお前さんの家の片隅へでも置いといてお呉れ。」

「いゝともさ、いゝともさ。ちよつともかまやしないよ。」ナスターシヤは唸つた。「だが、小父さん、何處がわるいんだね、お云ひよ。」

「何處か知んねえが、體ぢゆうが一體に變だよ。」

「心配することはねえよ。咳をするとき喉がいたいの？」

「いつも痛みどほしだ。俺らはもう死にかけてるんだ。たゞそれがりのこつた。おゝ、おゝ」病人は呻つた。

「脚をお包みよ。さうしなけれやいけないよ。」ナスターシヤは煖爐から降りて毛皮外套を彼にかけてやりながら云つた。

　夜ぢゆうランプがボンヤリと部屋を照らした。ナスターシヤと十人の馭者は床の上や腰掛の上に、大きな鼾をかきながら寢た。たゞ病人だけは、煖爐の上で力よわく呻つたり咳をしたりして輾轉反側した。朝になつて彼は非常に靜かで

あつた。

「わたしはゆふべ奇妙な夢をみたよ。」とコックは翌朝、曉の薄ボンヤリした光のうちに脊のびしながら言つた。何でもフエヨードル小父が煖爐から降りて來て樹をきりに行つた樣だつたよ。「何かお手傳しようかな、ナースチヤ。」と云ふのだ。そこでわたしは云つたのだ。「ぢや、外へ出て樹を截つてくれたらいゝぢやないか。」ツて。するとね、あの人は斧を取つて樹をちよぎり初めたんだよ。その早いことツたら。木片が四方八方に飛び散る位だつたのだよ。そこで私や、「一體これは何う言ふわけなんだね、お前さんはあんなにひどくわかるかつたのに。」つて云つたのさ。するとあの人は云ふんだよ。「いや俺等は達者なんだ。」ツて。そしてその手を動かしつゞけるのさ。その時の恐ろしかつたことツたら。わたしは喚いて、そして眼がさめたのさ。まさか死んでやしまいな。フエヨードル小父、フエヨードル小父、フエヨードル小父ツてば。」

　しかしフエヨードルからは何一つの言葉も來なかつた。

「まさか死んでやしめえなあ。見て來やうぢやねえか。」半睡半醒の眠さうな馭者の一人が云つた。

煖爐からぶら下つて居る、赤い、毛だらけの痩せた手は冷たくそして白かつた。

「檢察官にとゞけて來るがいゝ。死んでる樣だ。」と馭者は云つた。

　フエヨードルは親戚をもたなかつた――みんな死んでしまつて居たのだ。次の日彼等は森の後の新しい教會の墓地に彼を葬つた。その四五日の間、ナスターシヤは自分の見た不思議な幻について、また、フエヨードル小父と別れた最初の人が彼女であつたといふことについて、誰彼の區別なしに話して居た。

三

　春が來た。町の濕めつぽい街道の氷つた堆肥の間を、小さな急流が音をたてゝ流れた。町の中を動きまはつて居る人

々の着物の色あひや會話は快活で嬉々として居た。垣根の後ろの小さな花園には、木々の蕾がほころび出し、その枝は新鮮なそよ風にふかれて殆んどきゝとれる位に揺れた。どこもかしこも一帶に雪どけがした。透きとほつた露の玉は小止みもなく滴つた。雀は喧びすしく囀りながら、小さな翼でとびまはつた。路の日あたりの好いところでは、町の家でも村の家でも、垣根のうしろにあらゆるものが輝いて生き〳〵して居た。天にも地にもそして人の心の裡にも若さと幸福とが甦つた。大通りの一つの家である、あの紳士の邸宅の前には、刈りたての麥藁が並べられてあつた。家の中にはそんなに熱心に外國に行きたがつて居た例の死にかゝつた病人が居た。病室の閉ざされた戸のそばには病人の良人と肥つた女が立つて居た。長椅子の上には、元氣の無い眼をした僧侶が、聖帶の中に包まれた何かを持ちながら坐つて居た隅の方の大きな安樂椅子には、一人の年とつた婦人の母が引きつる樣に泣いて居た。彼女の傍には一人の下女が、清潔な手巾を手にして立つて居た。そして此の老婦人の云ひつけを待つて居た。他の下婢は此の老婦人のこめかみを揉み乍ら彼女の帽子の下の灰色の毛の間を吹いて居た。

「さあ、何卒。」と良人は戸の傍で彼のわきに立つて居る頑丈な女(妻の妹)に云つた。「彼女は其麼に貴女を信用して居るのです、貴女は彼女に什麼に話すべきかを知つて居なさる、ね、いつてうまく說きすゝめて下さい。」かうして彼は今少しで戸を開くところであつた。然し姉はそれを遮つた。それと同時に手帛で眼を拭き乍ら頭を振つた。

「いゝわ、もう泣いてた樣には見えませんわね。」と彼女は云つた。そして自分で戸を開けて中に入つた。

良人は非常に昂奮して居た。そして全く氣を取り亂して居る樣に見えた。彼は老婦人の方に歩みを寄せた。併し五六歩とあるかぬうちに向き返つて室を横ぎり、司祭の方に近づいた。司祭は彼を眺めた。そして眼を天に向けて溜息をついた。彼の濃い灰色の口髯は、上にあがり直ぐにまた下つた。

「あゝ！　あゝ！」と良人は云つた。

「どうにも仕樣がありません。司祭は歎息し乍ら云つた。そして再び彼の眉と髯は上つて下つた。

「そして彼女の母が其處に！」と良人は絶望的に云つた。「母には耐へ切れないでせう、どんなに愛してるんですから。あゝどうしたらいゝのか。どうか貴僧、母をなだめて此の室を出させて下さい。」

司祭は立ち上つて老婦人のところへ行つた。

「母の情！――あゝ！　誰が其愛をはかり得ませう。併し！　神は惠み深い。」と彼は云つた。

老婦人の顏は急に曇つた。そしてすゝり泣きし始めた。『神は惠み深い。』彼女が少し靜まつた時司祭は繰り返した。『此麼ことがあるんです。私の教區内に一人の病人があつたんですがね　マリア・ドミトリエウナさまよりもずつと重い病人でね。――ところがあなた、その病人が、それはたゞ店商人のでしたがね、藥草でもつて一寸の間に快癒つたんです。そして其商人が今モスクワに居るんです。で私は今、ワシリイ・ドミトリイエヰチさんにその男の事を話して居た處です。が、試めして見ては何うです？　何は兎に角、病人を滿足させるでせう。神にはどんな事でも出來ない事はありませんから。」

「いえ、彼女はもう助かりますまい。」老婦人は遮つた。

「何故、神樣は彼女をお取りにならなければならないでせう、私をこのまゝにしておいて。」そして彼女は殆んど意識を失つてしまふ程に激しい感情に捕はれてしまつた。病人の良人は手で顏を掩うて室をかけ出した。外の廊下で遇つた始めての人物は六歳になる彼の子供であつた。子供は其小さな妹を追ひかけ乍ら上機嫌で居た。

「お子供さん達をおつかさんの處につれてけと被仰るのですか。」と乳母は尋ねた。

「いゝや奥樣は皆に會ひ度がらない、會ふと氣がくるふだらう。」

子供たちはちよつと止まつて、父の顏を一心に眺めて居たが、やがて又直きにふざけちらして愉快さうに叫びながら遠くの方へ走つて行つた。

「此の兒は私の馬なのよ。」と小さな妹を指さしながら子供は叫んだ。

同時にまた、次の部屋では病人の從妹が病人の側に坐つて死の用意をさせる樣に巧みに、話をだん〳〵とその方に向けて居た。醫者は他の窓際で藥を調合して居た。病人は白い閨衣を着、四方八方から枕でもつてつゝかいぼうをされて寢床の上に坐つて居た。そして默つて從妹を眺めて居た。

「いゝえ、これ。」と彼女は、急に從妹の言葉を遮つて叫んだ。「そんな準備をさせないでおくれ、私を子供にしてお呉れでない。私は基督信者です。私はそんなことはみんな知り拔いてます。私はもう長く生きて居ないことを知つて居ます。私はまた、うちがもつと早く私の云ふことをきいて下さつたなら、今頃は伊太利に行つて居て、そして多分――いや確かに――全くよくなつて居たらうにと思ふんです。衆人が、うちにさう云つて居るんです。だが神樣の御旨なら何うにも仕樣がない。私逹はみんな償はなけれやならぬ澤山の罪をもつて居るんです。私はそれを知つて居ます。だが私は、神樣の御慈悲によつて、それ等の罪が赦されるだらうと思ひます、いゝえ、赦されねばなりません。私は自分の胸の中をしらべて居るんですが、私も澤山の罪を犯して居ます。けれど、私は、その罪の償ひのためにどんなに苦しんだでせう私は私の惱みを忍耐ぶかく堪へ忍ばうとつとめました。」

「ぢや懺悔僧をおよびしませう、ね、あなた。さうして神樣から赦されたら、ずつと樂々するでせうから。」と從妹は答へた。

病人は同意のしるしに頭を垂れた。

「神さまお赦し下さい。私を――罪人を」彼女は呟いた。

妹は外に出て懺悔僧を手招いた。

「もうあの世の人です。」と彼女は眼に淚をためて夫に云つた。

良人は泣いた。司祭は戸を通つて病室に這入つて行つた。老婦人は尙も何も知らずに居た。さきの方の座敷では何事

も凡て全く穩かであつた。約五分間もして、司祭はまた戸の外に出て來た。そして聖帶をはづして髮の毛を撫でた。

「有りがたい事には、段々靜平になつて來ましたよ。」と彼は云つた。「いま家人さんに會ひ度がつて居ます。」

從妹と良人とが病室に入つて行つた。病人は靜かに泣きながら聖像を眺めて居た。

「御目出度う、私のお友達。」と良人は曰つた。

「有りがたう。今はどんなに私はせい〳〵して居ますか。何とも言ひ樣のない歡びを感じて居ます。」と病人は言つた。そして輕い微笑が彼女のやせた唇に浮んだ。「什麼に神さまは惠み深いのでせう！——さうぢやなくて？ 神は惠み深くして全能でゐらつしやる。」そして唇に熱心な祈禱を唱へ、眼を細くして聖像を瞶めた。

遽に何かゞ彼女に起つたかの樣に見えた。彼女は彼女の良人を招いて自分の側にひきよせた。

「あなたは私の御願ひすることを少しもして下さらない。」と彼女は纖弱いぶつ〳〵聲で言つた。

夫は首をのばしておとなしく聽いてやつた。

「何だね、お前。」

「私は幾度となく、こんなお醫者さんたちは何も知らないつて言つたか知れないのに。ちよつとした女の醫者があるんです。そのお醫者さんたちなら癒してくれるのです。さう神父さんが云つて居らしたわ。店商人があるツて……それをよこして。」

「誰をだつて、お前。」

「おゝ、あなたは何も御存じでない。」病人は顏をしかめた。そして眼を閉ぢた。

醫者がやつて來て彼女の手をとつた。脈は明かに次第々々に弱くなつて居た。彼は夫を手招いた。病人はその手ぶりを見た。そしておづ〳〵とあたりを見まはした。妹は背をそけて泣いた。

「泣かないでお呉れ、私のことを泣かないでお呉れ。」と病人は言つた。「私の最後の平和が奪はれてしまふから。」

『あなたは天使です。』と妹は彼女の手に接吻をしながら言つた。

『いや、〳〵、こゝを接吻してお呉れ！……みんなは、ほんの屍に過ぎない手に接吻するのよ。おゝ神よ、神よ！』

その同じ夜、病人は既に死骸であつた。そしてその死骸は大きな家の客間の中に、一つの棺臺の上に置かれてあつた。戸を締めた大きな室には、寂しい讀經者が鼻聲でダビデの詩篇を節をつけて讀んで居た。大きな眼の燭臺の蠟燭から煌々たる光りが死人の白い額に、厚ぼつたい蠟の樣な手に、膝や足を凄い浮彫に見せた棺衣の石の樣に硬い襞に、射し輝いて居た。讀經者は單調な調子で絶間なく誦へつゞけた。そしてその靜かな室で、彼の言葉は異樣に響いては消え去つた。時々、遠い室からは、子供たちの聲や喧騷の響が飛んでやつて來た。

『爾そのみ顏をかくし給ふ時、彼等は惱む。』讀經者は曰つた。『爾彼等の息をとり去り給ふ時、彼等は死す。而して再びまた塵に還る。爾その靈をおくり給ふ時、彼等は甦り、而して地の面を新にす。かくて主の榮光、かぎりなく保たん。』

死人の額は嚴肅で壯嚴であつた。浄い冷たい前額と、固くしまつた唇は靜乎として動かなかつた。彼女は非常に注意深かつた。しかし彼女はその時でもなほ、これらの悲愴な言葉をきゝわけることが出來たであらうか。

四

一月程して大理石の石碑が死人の墓場の上に建てられた。馭者の墓はなほもその首石がなかつた。そしてたゞ活々とした新鮮な草がその小さな塚の上に生えて居た。此の世を去つたあの人がかつて存在して居たと云ふ唯一のしるしとして。

『お前、罪だよ、そして名折れだよ。セリョーガ。フエョードルに石塔をたてゝやらにや。』とコックは或る日、驛亭で云つた。『まだ冬だ、冬だ、ツて、ばつかり云つて居たが、なぜ、その約束を果さないんだよ。私はみんな聞いて知つてるんだよ。あの爺は一度やつて來て、何故お前が墓を買はないかつて訊いてたよ。お前が買つてやらにや、彼がまたや

つて來てお前を締め殺すよ。」

「いゝよ、俺らがしらねえツて云つたかね。」とセリョーガは答へた。「俺らの言つた通り石を買ふよ、石を買ふよ、一留半も出しや買へるだよ。俺あ忘れやしねえよ。町に行きさへすれや買つて來べえ。」

「何は兎もあれ十字をたてろよ、さうせんぢやなるめえよ。」年寄りの馭者が口を挿んだ。「それや何と云つてもてつきり手前がわるいよ。――手前、まだあの靴を穿いて居るだらうがな」

「穿いてるとも、だが何處から十字を取つて來るだね――材がないのに伐られあしいなよ。」

「材がなけや伐られねえ、何てえ。いゝ口實だ。古い棒切で拵らへれやえゝがな、いや、斧をもつて何時もより朝はやく森の中へ行きな、欒にいくらでも伐られるよ。若え白楊を伐るんだ。お前がゴルベツ(十字架の墓、その上に覆ひがある)を造らへるのにやそいつで十分だ。」

次ぎの日、朝はやく、日がまだ殆んど明けやらぬ間に、セリョーガは斧をもつて森の中に入つて行つた。凡ゆる者の上に まだ太陽の光に照らされない、冷たい死んだ樣な霧の覆ひがかゝつて居た。東の方はなほも薄雲に掩はれて居る天の蒼穹にその薄白い光を反射しながら、だん〳〵明るくなつて行きつゝあつた。脚元の草の葉の一つも、高い樹の枝の一枚の葉も、動いては居なかつた。たゞ森の一ばん繁り合つた部分で稀にきこえる小さな翼のはゞたきや、地の上のバサ〳〵と云ふ音のみが森の沈默を破つた。俄然、自然には不思議な音が起つて、やがて また森の彼方へと消え去つてしまつた。しかし再びまた此の音が起つた。そして不動に立つて居る一つの古木の根下でその音が幾度となく單調に繰返された。一つの樹の頂きが常ならぬ震動をはじめた。みづ〳〵しい葉は何かを囁き初めた。その枝の一つにとまつて居た一羽の鶺鴒は一とび二とびした後に、その尾を動かしながら、小さな聲でピイと鳴いて次の樹にとび移つた。

下では斧が益々深く入つた音をたてた。汁多い白い木片が露にしめつた草の上に飛び散り初めた。微かなパチ〳〵と

云ふ音が打ちおろす斧のあとに、やつとつゞいた。樹の幹の全體が震へて前の方に曲つてはまた、直ぐさま元の樣に眞直になつた。低音でぶる〳〵とふるへながら。しばらくは全く靜かであつた。しかし直ぐにまた樹はやゝ前方に首だれた幹の裂ける音がきかれた。そして森の繁みをぶちこはし、小枝をひきちぎつて、濕つた土の方にドツと倒れた。斧の音も足音も止んだ。鶺鴒はまた叫んで、少し高くとんだ。樹にくツついて居た枝は鳥の翼をぶる〳〵震はせながらしばらくの間あちらこちらゆれて居た。しかしそれも他のものと一緒に、葉もろともに靜まつてしまつた。他の樹は今までよりはもつと喜ばしげに、その間につくられた新しい空間に不動の枝をひろげた。

太陽の最初の光線は雲をとほして空に輝いた。そして迅速に地と天とを通りすぎた。霧の浪は谷間を溢流し初めた。輝く露は綠の葉や牧草の上におどつた。透明な白い雲は靑い蒼穹を横ぎつて馳せた。鳥は森の深みを小やみもなくとびまはつた。そして恰も有頂天になつて居るかの如くたのし氣に囀つた。濕ひのある葉は木の上で喜ばし氣にそして靜かに囁いた。そして生きて居る樹の枝は、死んで倒れて居る樹の上で靜かにそして嚴肅にふるへた。(完)

編輯室にて

暑いので、事務所へたづねてみえる人も尠く、大抵村山さんが獨りしよんぼりと事務をとつてゐる日がつゞいてゐました。それに、東京ではずつと長い間天氣が惡くて、從つて道も惡く、實際外出がおつくうでありました。

×

それだけに事務所の壁新聞も、停滞しがちでありました。日々に新らたな事件が續出し日々に移り變る今の社會の現狀に於て、何とタイマンなことだつたでせう！　然し秋と共にこれから大いに精出しませう。

その代りみなさんも、又、以前のやうにしげ〳〵足を運んで出かけて來て下さい。遊びにゐらつしやい。本をよみにゐらつしやい。話しにゐらつしやい。家庭の愚痴も、職業上の不滿も、社會の不平も、一切合切事務所で洗ひざらしお互ひにさらけ出しませうぜ。

×

平塚らいてうさんが、しみ〳〵と『あなたの處では、雜誌も續けて出してゐられることだし、婦人團體にも關係が深いのだし、婦人界の新人がもつと出さうなものですが、人はないものでせうかねえ』と云つてゐられた。

ほんとうにさうですね、創作の方でも近頃流行のあの戀愛合評に於てでも、もつと、新しい婦人がなぜ打つて出ないのだろうかを、しみ〳〵思はせるでありませんか。

大新聞や、いはゆる一流雜誌に發表しなければちよつと、私たちの目につかないのですから、氣づかない處に、新時代は多くの新しい婦人を、作つてゐてくれるのかもしれないのですけれど――そして、ぜひさうあつてほしいのですが、先頃流行だつた戀愛問題の合評のときも、つく〳〵さう思ひましたよ、もう戀愛時代は卒業してしまつたやうな、いはゞ戀愛の方で、御めんかうむりますと、あちら向いてゆきさうな老人樣ばかりが、むし返し〳〵躍起になつて戀愛に就いて、論じてゐらつしやるばかりで、肝心のいはゆる戀愛時代の若い娘さんたちは何を考へ、何を行ひつゝそれらを讀んでゐるでせうか。又どんな戀愛を現在に創造してゐるでせうか。時代的な流れ、ばかりは爭はれぬと、私は思ふのですが。

×

私、ひまをみて『婦人運動』をよんでゐて下さる皆さんに。――さしあたり東京市内外だけでも――お會ひしたいと、切に々々さう思つてゐます。

ほんとうに、讀者になつて私たちの仕事をお援け下さつてゐる方のことを思ふと、一遍會うてお禮が云ひたいし、仕事の現狀を聞いて頂きたいし、それに第一には、どんな生活をしてお出でる方が、私の仕事を援けて下さつてゐられるのか、それが知りたくてたまりません。面と向つて會へば、ほんとうに話のへたな口不調法な私なんですけれど……

×

發行日のおくれるのを恐れて、お約束のすんでゐる原稿であすかあさつてには、頂けさうなもの二三、次號まわしにして締切りを早く切りあげて印刷所にまわしました。

來月よりは、もつともつゝ早くお屆けします。さうして、早く、書店にも並べて一般にうり出したいと心がけてゐます。みなさんもいゝ秋をお迎へなさいませ。職業婦人社としても、この秋こそは、と思つてけんめいにやつてをります。(む)

事務所を探したのが、いくら、秋の終りだからと云つて、『日本は夏の無い國だ』と思つたわけでもないのでせうが、どう見ても南洋人か猫の好きさうな家です。そろ〳〵暑さに向ひはじめると、むろのやうな事務所の夏はさぞかしあついだらうと、はやくから云ひ合ひ心配し合つたことでした。 また、『お暑うございます。事務所は大變でせうねえ』と云ふのが、御挨拶のやうになつて居ました。ところが、今年は太陽の黒點の影響とやらで、まあ思つたよりもしのぎよく、どうやら蒸し殺されるのは、まぬかれて生きのびて來ました。

たゞ雨のひどい日には、ふき降りがしてたまらないので、窓をすつかりしめ切つてしまふため、その時はまるで蒸し風呂に浸つて居るやうな工合でたまりませんが、あと二三ケ月も辛棒すれば、やがてさむくもなりませうから、この分ではさう大したこともないでせう。

それにつけても早く『職業婦人の家』が出來たら、先づ第一に、我が『婦人運動』の編輯室は、夏は涼しく、冬は暖く、春秋はさわやかな申分の無い室にしませうと、今から大風呂敷をひろげて、その意氣たるや、まことに當るべからずなのです。

でも時々意地の惡い人が居て『なんだもう建つたのかと思つたのに、まだなの？』なんてひやかすもので、あはてゝひろげた風呂敷をたゝんでヒカンする事もあります。そして更に『きつと建てゝみせますよ！』とかたく〳〵決心するのです。(ふ)

殘暑お見舞申上げます

いろ〳〵と雜務にかまけて八方ふさがりの御ぶさたになつてゐますが、どうぞ惡しからず……この秋は「職業婦人の家」の建設準備と「婦人運動」の基礎擴充のために存分働き貫きたい考へでをります。從前にもましてお加勢いただきたく謹んでこゝにお願ひ申上げます。

職業婦人社

◇誌代はすべて前納にして下さい

前納誌代

壹部　貳拾五錢（郵税一錢）
半年分　壹圓四十錢
壹年分　貳圓八十錢

送金法

送金は振替が一番便利です。
誌代の受取證は別に出しません。
雜誌發送を以てこれに代へます。

昭和三年八月卅日　納本
昭和三年九月一日　發行

發行編輯兼印刷者　東京市牛込區市ケ谷本村町四　村山文子
印刷所　東京市神田區淡路町二ノ三　協營社
發行所　東京市牛込區市ケ谷本村町四　職業婦人社
振替東京六四一六〇番

「世界美術の見方と味ひ方」の良參考書

野口米次郎著 日本美術讀本

石井柏亭著 西洋美術讀本

菊判約三百頁　原色版網版挿畫多數　定價各一圓五十錢　送料二十錢

東洋の美術に含まれる深奥なる精神、西洋の美術に現はれる複雜なる傳統、それの眞髓に觸れるには、一體美術を何ういふ風に觀、何ういふ風に感じ、何ういふ風に味はふべきであるか、この常識を備へてゐなければ、美術に對するほんとうの感興は生れて來ない。此に著はされた二つの讀本は、各著者が世界美術理解と鑑賞の爲めに特に意を用ゐて美術の常識の一通りを一冊のうちに書き收めたものである。故に尤も親切なる美術鑑賞入門の手引書であると謂へる。

東京麴町區下六番町
振替東京二九六三九番
平凡社

（内容一般）

○日本美術の精神（第一論）
○日本美術の精神（第二論）
○日本美術の精神（第三論）
○浮世繪の美
○屏風藝術
○花鳥畫家の世界
○舌足らずの藝術美
○藝術の單調美
○日本最大理想的藝術家
○乾山
○挿畫の解説

（内容一般）

○序説（西洋美術を觀る人々へ）
○西洋美術略史
○西洋建築の話
○西洋彫刻の話
○西洋繪畫の話
○西洋工藝の話
○西洋美術に取扱はれたる主題

大正十三年十一月二十二日第三種郵便物認可
昭和三年八月三十日印刷納本
昭和三年九月一日發行（毎月一回一日發行）

婦人運動

第六卷第八號
（定價二十五錢）

